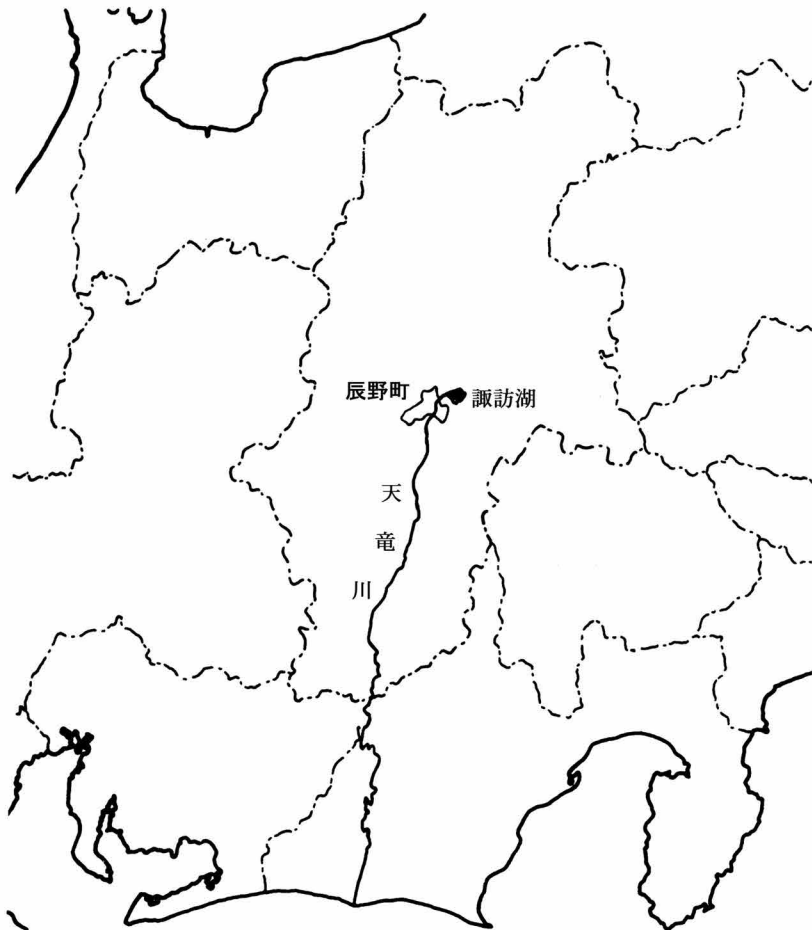


上の山遺跡Ⅲ

長野県辰野高等学校校舎改築に伴う
第4次埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

長野県辰野町教育委員会





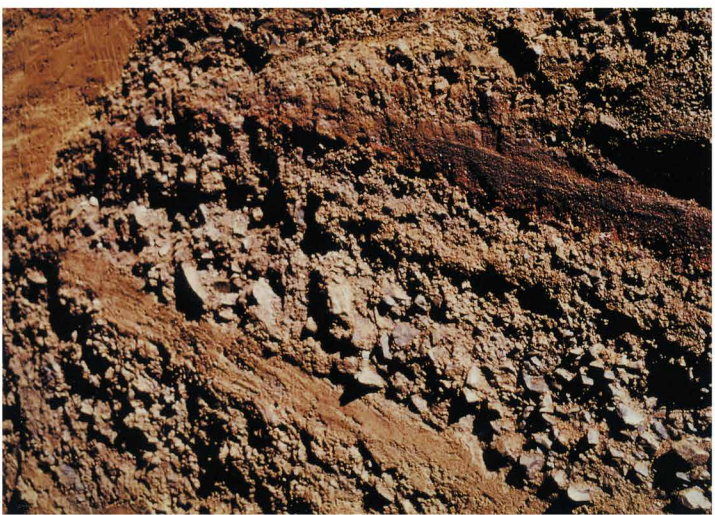
6号住居址埋甕



8号住居址出土陶磁器



三岳スコリア層
→
3 m



千本松スコリア層
角礫中には含まれている
←



← 辰野軽石層
きれいに上方粗粒化(逆グレイディング)を示す軽石層は礫状に分断されている

序

上の山遺跡は、辰野町宮木辰野高等学校一帯に位置し、古くから縄文時代の遺物包蔵地として知られていました。また「天白の城」として戦国時代末期矢島氏の館跡とも伝えられてきたところで、過去に多くの遺物が採集されてきました。なお、昭和60年には辰野高等学校テニスコート造成に伴ってこの遺跡に隣接する滝洞遺跡の発掘調査が行われ、中世の遺構と遺物が出土しました。

また、校舎改築に伴い、この上の山遺跡の第1次発掘調査が昭和61年に実施され、縄文時代の遺構とともに中世末期の堀跡が出土し、城館跡の存在を裏づけました。

なお昭和62年には昇降口棟及び音楽棟建設に伴う第2次調査が行われ、引続き昭和63年に昇降口棟建設によるポーチ、スロープ、階段、足洗場等建設にあたり第3次発掘調査が実施されました。その結果、縄文時代早期の小堅穴群をはじめ、同前期、中期の住居跡が出土しました。また中世城館の腰曲輪と考えられる遺構が発見され、第1次調査の堀跡とともに貴重な資料となりました。

今回実施された、第4次発掘調査地区は、辰野高等学校敷地内の最も南側に位置した商業棟建設に伴うもので、同校の委託を受け、町教育委員会が主体となって調査を実施したものであります。

商業棟建設予定地は、旧建物建設当時に遺構が破壊され、調査は非常に困難をきたしましたが調査の結果縄文時代中期の住居跡、小堅穴をはじめ中世の半地下式住居跡、建物址等これらに伴う遺物が出土し大きな成果をあげることができました。

ここに調査報告書を刊行するはこびとなりましたが、ご指導を賜った長野県教育委員会文化課をはじめ、辰野高等学校、それに直接調査に従事された調査団の皆様に深く感謝申し上げますとともに、この報告書が広く活用されることを願う次第であります。

平成3年3月

辰野町教育委員会

教育長 小 林 晃 一

例 言

1. 本書は、長野県辰野高等学校商業棟建設に伴う、長野県上伊那郡辰野町大字伊那富3644の2番地に所在する上の山遺跡の第4次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は辰野高等学校長山崎耕藏と辰野町教育委員会教育長小林晃一との委託契約に基づいて行われた。なお、発掘調査団組織等の名簿は、発掘調査関係者名簿として別掲してある
3. 発掘調査は平成元年9月26日から11月10日まで現場作業を実施し、出土遺物等の整理並びに報告書の作成は平成2年12月10日から平成3年3月25日まで辰野町教育委員会が行った。
4. 発掘調査現場における記録は主として木下平八郎氏が担当し、遺構等の実測図作成は田畑幸雄が行った。また本書の編集、作成並びに遺物等の実測図作成、土器復元、写真撮影は主に木下平八郎氏があたり総括は友野良一氏が行い、地質調査の実測・分析・作図、原稿は松島信幸氏・寺平宏氏をお願いをし、報告書の執筆は友野良一、木下平八郎、松島信幸、寺平宏、田畑幸雄、が行ったものである。なお執筆分担については各文末に示した。
5. 遺構の番号については第1次調査からの通し番号とした。
6. 調査及び整理に当たっては、実測図、写真等作成したが、それらの資料は出土遺物とともに辰野町教育委員会が保管しているので、広く活用されたい。

発掘調査関係者名簿

1. 上の山遺跡第4次発掘調査団

調 査 団 長	友野良一（日本考古学協会員 宮田村）発掘担当者
調 査 副 団 長	丸山敬一郎（赤穂高校定時制教頭 伊那市）
調 査 主 任	木下平八郎（東洋陶磁学会員 飯田市）
調 査 員	山上秀樹（辰野高校教諭 伊那市）
発掘調査協力者	足助治明・小沢はつ子・熊谷雅局・厨川健次郎・小松祐二・杉山吉伸 竹入太郎・竹本儀三・茅野安男・堀内一雄・三沢栄市・溝口良平 宮下徳市・山内篤郎・山崎 馨・山崎友市・山崎善一・山本竹子 米沢三郎
整理作業協力者	宇治ひろゑ・工藤信子・田畑三千代

2. 辰野町教育委員会事務局

教 育 長	小林晃一
社会教育課長	小松弘茂（～平成2年3月31日）
”	三浦正義（平成2年4月1日～）
文 化 係 長	平泉栄一
文 化 係	田畑幸雄・福島 永

目 次

序	
例 言	
第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 保護協議の経過	1
第 2 節 発掘調査の経緯	2
第 II 章 遺跡の地形と地質	3
第 1 節 遺跡の位置と地形・地質の概要	3
第 2 節 調査地域の地質	6
第 3 節 歴史的な環境	13
第 III 章 発掘調査	16
第 1 節 調査の方法と調査結果の概要	16
第 IV 章 調査区の遺構と遺物	21
第 1 節 縄文時代の遺構と遺物	21
第 6 号住居址／第 7 号住居址／第 33 号土坑／第 34 号土坑／第 35 号土坑／第 36 号土坑／ 第 37 号土坑／第 38 号土坑／第 7 号小竪穴／第 8 号小竪穴	
第 V 章 中世の遺構と遺物	29
第 1 節 中世の遺構と遺物	29
第 8 号住居址／第 1 号建物址／第 2 号建物址	
第 VI 章 掘立建物址遺構	37
第 1 節 掘立建物址	37
第 1 号掘立建物址／第 2 号掘立建物址	
第 VII 章 結 語	39
参考文献	
図 版	

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺の地形・地質概略図	4
第2図	トレンチの地質断面図	5
第3図	トレンチの鉱物分析	7
第4図	荒神山のテフラ露頭のスケッチ	8
第5図	荒神山のテフラ・柱状図	9
第6図	伊那市横山の地層断面図	11
第7図	周辺地名分布図	12
第8図	周辺遺跡分布図	14
第9図	発掘調査区位置図（折込み）	17
第10図	発掘調査区グリット設定図（折込み）	19
第11図	第6号住居址遺構平面図	21
第12図	第6号住居址遺物	22
第13図	第7号住居址遺構平面図	23
第14図	第7号住居址覆土遺物	23
第15図	第33・34号土坑遺構平面図	24
第16図	第34号土坑出土遺物	25
第17図	第34号土坑出土遺物	26
第18図	第7号小竪穴・第35・36・37・38号土坑遺構平面図	27
第19図	第8号住居址出土遺物	28
第20図	第8号住居址出土遺物	30
第21図	第8号住居址覆土遺物	31
第22図	第8号住居址遺構平面図	32
第23図	第1号建物址遺構平面図	33
第24図	第1号建物址出土遺物	33
第25図	第2号建物址遺構平面図	34
第26図	第8号小竪穴及び附近の柱穴遺構平面図	35
第27図	第1号掘立建物址遺構平面図	35
第28図	B-6～12柱穴遺構平面図	36
第29図	第1号掘立建物址	37
第30図	第2号掘立建物址	38

写真図版目次

- 図版 1- 1 第4次発掘調査区全景 東から
1- 2 第4次発掘調査区全景 北から
図版 2- 1 第1・2号堀立建物址 西から
2- 2 第8号住居址 東から
図版 3- 1 第1・2号堀立建物址 南から
3- 2 第6号住居址
図版 4- 1 第6号住居址埋甕炉土器
4- 2 第6号住居址土器
図版 5- 1・2 第6号住居址埋甕炉
5- 3・4 第34号土坑
図版 6- 1・2 第34号土坑出土土器
図版 7- 1・2 第34号土坑覆土出土土器
7- 3 第33号土坑東側ピット出土土器
7- 4 同上裏面
図版 8- 1 第7号住居地
8- 2 第35・36・37・38号土坑
図版 9- 1 第7号住居址出土土器
9- 2 遺構外出土土器
図版10- 1 第8号住居址 西から
10- 2 第8号住居址 東から
図版11- 1 第8号住居址炉北断面
11- 2 第8号住居址上部破壊状況
11- 3 第8号住居址壁面痕跡
図版12 第8号住居址遺物出土状況
図版13- 1 第1号建物址 東から
13- 2 第1号建物址入口付近柱穴
図版14- 1 第1号建物址北壁面
14- 2 第1号建物址南壁面
図版15- 1~ 5 第1号建物址遺物出土状況
15- 6 第8号小竪穴遺物出土状況
図版16- 1 第7号小竪穴
16- 2 第8号小竪穴
図版17- 1・2 第7号小竪穴遺物出土状況
17- 3 第8号住居址覆土出土縄文土器石器
図版18- 1 16世紀各遺構出土の陶磁器
18- 2 第1号建物址出土刀子
図版19- 1 第9号小竪穴、第2号建物地（左）
19- 2 C・D-15・16の土坑、ピット群
19- 3 A・B・C-8の土坑、ピット群
図版20- 1 各遺構出土の小型石器
20- 2 第8号住居址出土の菰手石

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 保護協議の経過

上の山遺跡は、古くから土器、石器が出土し、多くの遺物が採集され、縄文時代の遺跡として知られてきた。また、天白の城と呼ばれる中世館跡のひとつでもあった。大正初年、この地に伊北農蚕学校が設立され、戦後長野県辰野高等学校となり現在に至っているが、昭和54年校舎改築期成同盟会が発足し、校舎の改築が開始された。これに伴って、昭和57年12月第二体育館建設に係る埋蔵文化財の立会調査が行われ、昭和60年12月テニスコート新設により、上の山遺跡に隣接する滝洞遺跡の発掘調査が実施され、中世の遺構、遺物が出土した。

さらに昭和61年 8月には、混合教室棟、部室棟及び浄化槽の建設に伴って発掘調査が行われ、縄文時代や中世の遺構、遺物が多数出土し、一帯は縄文時代の集落址であるとともに、中世末期の城館跡であることが明らかとなった。(第1次調査)混合教室棟の建設に続き、この北隣りに生徒昇降口棟、さらに管理棟東に音楽室棟の建設が計画され、昭和62年10月に辰野高等学校、辰野町教育委員会、考古学研究者友野良一氏の三者で保護協議を行った。その結果、建設予定地の941.1㎡を対象に発掘調査を実施し、記録をのこすこととなり、11月、辰野高等学校の委託を受け、辰野町教育委員会が主体となって調査を行うため、友野良一氏を団長とする調査団を組織し、11日から調査を開始した。(第2次調査)

ところが、当初辰野高等学校では計画図により発掘対象面積は941.1㎡と判断していたが、実施設計図によれば昇降口棟にさらに、ポーチ、スロープ、階段、足洗場等が付属することが判明し12月 7日長野県教育委員会文化課、辰野高等学校、辰野町教育委員会の三者により保護協議を行い、昭和63年 2月22日から第3次発掘調査が実施された。

今回の第4次発掘調査は、昭和63年 6月辰野高等学校から平成元年12月着工予定で商業棟建設にあたり辰野町教育委員会に依頼があったが現在のスタッフでは対応が困難なため長野県教育委員会で調査をしていただくよう回答した。その後数回にわたり辰野高等学校より調査の依頼があった。

平成 2年 5月10日長野県教育委員会高校教育課から「埋蔵文化財発掘調査の通知」が送付され事業の推進にあたり格段の配慮をお願いしたい旨、申入れがあった。

平成元年 6月16日、長野県教育委員会文化課、辰野高等学校、辰野町教育委員会の三者で商業棟建設と発掘調査についての協議を実施し再度調査の依頼があったが検討調整をすることとした。引続き 8月24日協議をした結果、辰野町教育委員会で発掘調査することで決定し、辰野町教育委員会では急拠調査団を組織、 9月26日辰野高等学校長山崎耕藏と辰野町教育委員会教育長小林晃一との間で発掘調査委託契約を締結し10月 2日調査を開始した。

第4次調査の出土遺物の整理、報告書作成作業は平成2年度とし、第2次、第3次分の報告書は既に発行されているので参照されたい。(田畑)

第2節 発掘調査の経過

調査日誌

- 10月2日(月)～3日(火) 商業棟建設予定地の東側部分から重機により、表土除去し第4次発掘調査を開始する。尚南西角で埋甕が確認される。
- 10月4日(水) 建設予定地北側階段部分の表土除去と地質調査用ピットの掘削を重機で行いテントの設置、器材の搬入、表土除去したところのジョレンがけと排土作業。
- 10月5日(木)～6日(金) 建設予定地の北側断面、地質調査用ピットの整備と表土除去した中央部分のジョレンがけ、南側断面のセクションの測量、中央部分より遺構のプランを2ヶ所確認した。
- 10月7日(土) 地質調査用ピットの検査用の土を北側断面上部から20cm間隔に29種類採取し学術的な調査を行う。
- 10月8日(日)～11日(火) 雨降りのため現場は休んだが地質調査用の土の採取が不十分なため再度数ヶ所から採取した。
- 10月12日(水)～13日(木) 建設予定地西側面の遺構、柱穴、土坑、小竪穴、中央ベルト、地質調査用ピット等の清掃、地質調査用ピットの写真撮影、住居址と思われる遺構から古銭と内耳土器の口縁部、その他に遺物が30点程出土した。本日グリットの設定をした。
- 10月14日(金)～15日(土) C～F-8～12グリット内へトレンチを入れる。小竪穴と土坑の確認、住居址と思われる遺構から縄文、中世の遺物が出土、1号建物址内の掘下げ、古銭が出土した。
- 10月17日(月)～19日(水) 1号建物址の掘下げと8号住居址ベルト、ロームマウンドのセクション、中央部分の柱穴の測量並びに清掃を行う。
- 10月20日(木)～22日(土) 6号住居址の内部と小竪穴、DE-6～10とC～F-8～12の各遺構の測量と1号建物址、6号住居址の埋甕の半カットの周り、ロームマウンドの掘下げを行う。全調査区の全体測量。
- 10月24日(月) 8号住居址、中央部の柱穴の測量、1号建物址の清掃、写真撮影を行う。尚建設予定地南側へ道路が出来るということで表土の除去、ジョレンがけ。現地説明会を行う。
- 10月25日(火)～27日(木) 道路部分の表土除去したところ掘下げ、土坑の半カットした部分セクションの測量、貯蔵庫、ロームマウンド、8号住居址の堀上げを行う。
- 10月28日(金)～31日(月) 道路部分の土坑の堀上げ、全調査区の清掃と写真撮影並びに測量を行う。
- 11月1日(火)～2日(水) AB-2～4の埋甕の測量、写真撮影、取上げを行い、6号住居址の溝のレベルと測量、写真撮影、7号住居址の堀上げ、校舎建設予定地の断面測量、小竪穴の写真撮影。
- 11月6日(月)～9日(木) 全体的に残った測量、写真撮影と辰野高等学校から借用した倉庫の片付け。
- 11月10日(金) 道具小屋の片付けとテント、調査器材等の撤収を行い、第4次調査の現場作業終了。
(田畑)

第Ⅱ章 上の山遺跡の地形と地質

第1節 遺跡の位置と地形地質の概要

1. 遺跡の地理的立地

上の山遺跡は長野県上伊那郡辰野町宮木の長野県立辰野高等学校を中心とする一帯に分布する。辰野高校は辰野町中心部の市街地の西側に分布する段丘状の高台にある。この高台を湯舟面と呼ぶ。市街地からの標高差は15~20mである。

辰野町は伊那盆地の最北端に位置する。諏訪湖から流れてきた天竜川と、小野・川島地区から流れてきた横川川とが合流して、広い沖積低地ができ、市街地が発達している。遺跡のある湯舟面は、木曾山脈最北端にあたる^ほ檜沢山(1248.6)の東山麓にある。山麓に並んでいる小扇状地群が湯舟面をおおい、市街地に面している高台の縁は段丘崖と同じような直線状の急崖となっている。

2. 横川-辰野断層と湯舟面

上の山遺跡のある湯舟面は段丘とよく似た地形をなしている。しかし、通常の河成段丘ではない。檜沢山の山麓部が横川川と平行する断層によって持ち上がった変動地形である。この断層を横川-辰野断層と呼ぶ。本断層は最新の地質時代になって動いている代表的な活断層である。

横川-辰野断層は小野から横川川の谷に沿って辰野町宮木にたっしている断層である。断層の方向は北北西-南南東、長さは10kmである。南端部の2kmは小横川谷の出口から天竜川までにあたり、この部分が湯舟面をつくる断層崖となってあらわれている。西上がり東落ちの垂直変位と左横ずれ変位を示している。垂直変位量は湯舟団地付近で約20m、南端部のチノン工場付近で約10mとなっている。

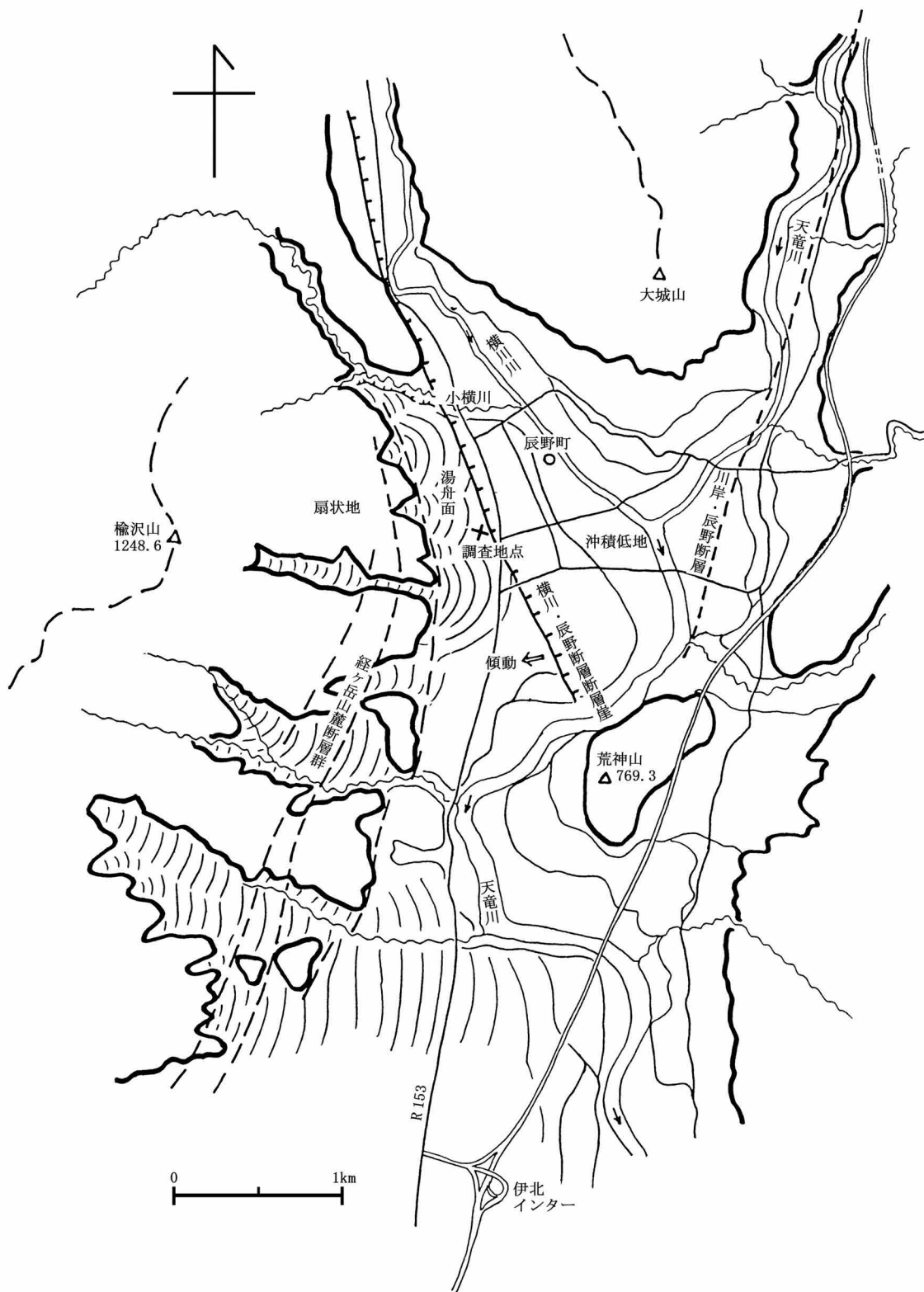
辰野町中心部の沖積低地の形成に小野-辰野断層が深くかかわっている。天竜川と横川川とが辰野町で合流して氾濫原をつくっている。合流した天竜川は横川-辰野断層による下流側の隆起の影響を受けてせき止められてしまう。辰野町の沖積低地は横川-辰野断層の影響による氾濫によって造られてきた。さらに、断層より西側の土地が隆起したため、段丘状の変動地形である湯舟面が造られたといえる。

3. 周辺山地の地形と地質

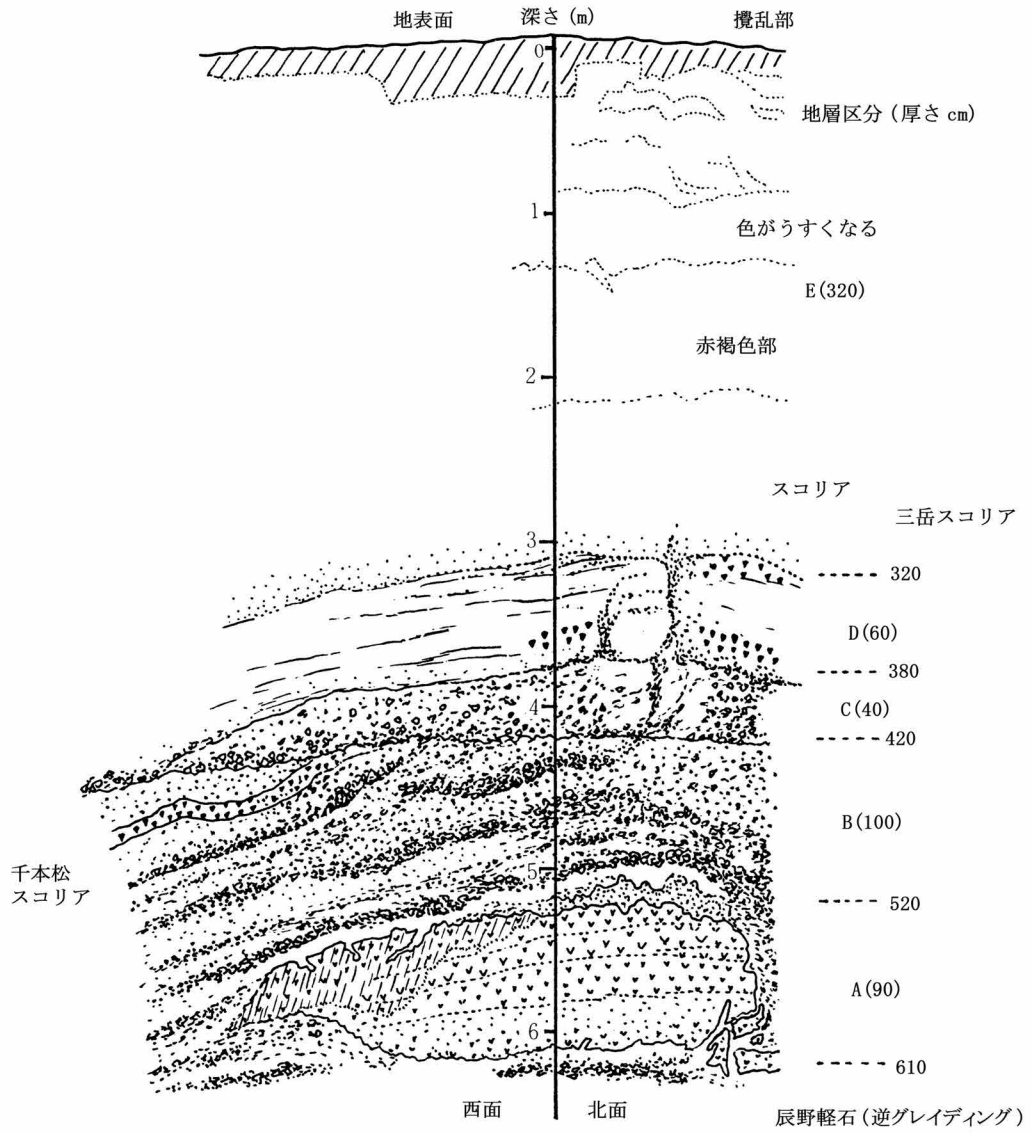
遺跡一帯の西側は檜沢山の斜面となっている。檜沢山は木曾山脈の北部に位置する経ヶ岳山塊の北端にあたる。山地と盆地との境界部には経ヶ岳山麓断層群があり、この断層による三角末端面からなる斜面が遺跡の西側山地にあたる。このため、湯舟面には檜沢山方面から押し出した山麓扇状地が並んでいる。

檜沢山一帯の山地は領家帯の変成岩類からできている。泥質岩を源岩とするホルンフェルスを主とし、砂質岩や礫質岩を含んでいる。これらのホルンフェルスの変成度は黒雲母帯に属し、領家帯の中で一番弱い変成相の部分にあたる。このホルンフェルスは辰野町の北側の山地である大城山山塊や、天竜川の東側の山地一帯に連続している。

また、天竜川の左岸側には荒神山(769.3)を代表とする丘陵が発達している。この丘陵は、岡谷市から諏訪市にかけ、諏訪湖南嶺の丘陵地帯が南下して辰野町に達しているもので、丘陵をつくる地質は塩嶺累層と呼ばれる凝灰角礫岩~火山角礫岩および鉄平石型の溶岩である。



第1図 調査地周辺の地形地質概略図



第2図 トレンチの地質断面

第2節 調査地域の地質

1. トレンチの地質断面

辰野高校調査地点において深さ 6m 余のトレンチを掘削した。トレンチ調査によって得られた地質断面（図2）と鉱物分析（図3）を中心に調査地点の地質説明をおこなう。

辰野高校トレンチで観察された地層は全体の厚さが 6m で、下から A、B、C、D、E の各層に区分される。以下、各層ごとの特徴を述べる。

A 層

深さ 5m 20cm より、6m 10cm までで、厚さ 90cm である。トレンチの北面に厚さ 90cm の辰野軽石層があらわれている。以下、テフラの名称については竹本ほか 1987 による。辰野軽石は団塊状で、横への連続がない。大きな礫状団塊をなす。軽石は逆グレイディングを示す。最下部の軽石粒が 2～8mm、続いて、1～2mm、1～4mm、2～6mm、2～10mm と順次第粗粒化している。全体に黄白色を呈し、鉱物組成は磁鉄鉱>輝石>普通輝石>角閃石である。軽石層は色調と粒度のちがいにより 4 層に細分できる。最下部層のみは上方細粒化を示し、上の 3 層は上方粗粒化を示すと同時に、全体では上位層ほど粗粒となっている。

礫状の辰野軽石の周囲はねん土質角礫層である。角礫の礫種はすべて楡沢山方面から供給されたと思われるホルンフェルスである。辰野軽石の形態と、そのまわりを充填しているねん土質角礫層の産状から、この地層の成因は気候の寒冷化に伴うソリフラクションである。礫状化によって移動がおこなわれているが、地層の逆転は起こっていない。

B 層

深さ 4m 20cm より 5m 20cm までで、厚さ 1m である。角礫の混入がおおくなり、トレンチの各面ごとに岩相変化が著しい。西面では礫径の大きな角礫が密集する部分と粘土質で細かい角礫を主とする部分とが互層して重なっている。全体に山側から谷側に向かって傾斜するように堆積しており、崖錐性の堆積相を示している。上部の細粒部に赤味を帯びた黒褐色のスコリアがはさまれている。成層する部分で厚さ 10cm を示す。スコリアの粒径は 3～5cm、黒味の強い色は千本松スコリア層に似ている。その鉱物組成は磁鉄鉱>しそ輝石>普通輝石>角閃石である。

C 層

深さ 3m 80cm より 4m 20cm までで、厚さ 40cm である。角礫層を主としており、らくだ色の粘土が礫の間をうめている。北面では粘土質であるが西面から南面へと礫質に変化し、B 層と同様、崖錐性の堆積相を示す。とくに西面では、B 層を斜めに切って堆積している。粘土質の部分は褐色の火山灰で鉱物組成はしそ輝石>磁鉄鉱>普通輝石>角閃石である。

D 層

深さ 3m 20cm より 3m 80cm までで、厚さ 60cm である。赤褐色のスコリアを混入する粘土質角礫層でソリフラクションによる再堆積層である。混入する赤褐色のスコリアは三岳スコリア層と似ている。スコリアの粒径は 2～3mm、鉱物組成は、しそ輝石>磁鉄鉱>普通輝石>角閃石>かんらん石である。

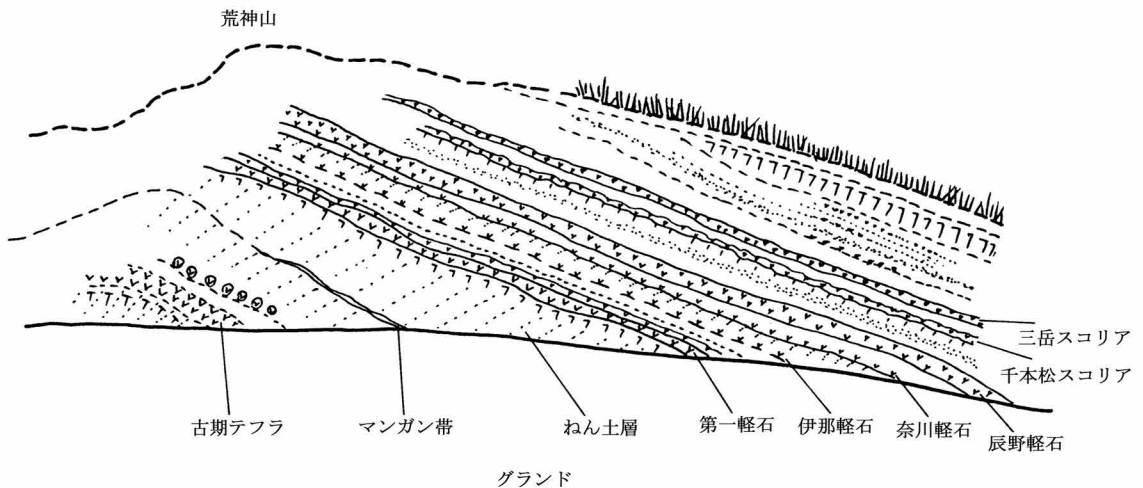
E 層

深さ 80cm から 3m 20cm までで、上方が攪乱しているので厚さは不明であるが、310～240cm である。全体に火山灰質で、下方ほど角礫の混入がおおき、上方に移るにしたがい風成の褐色火山灰へと移り変わっていく。最上部の 0～80cm までは地層が人工的に攪乱されており調査不可能である。このため A T 火山ガラスは確認できない。

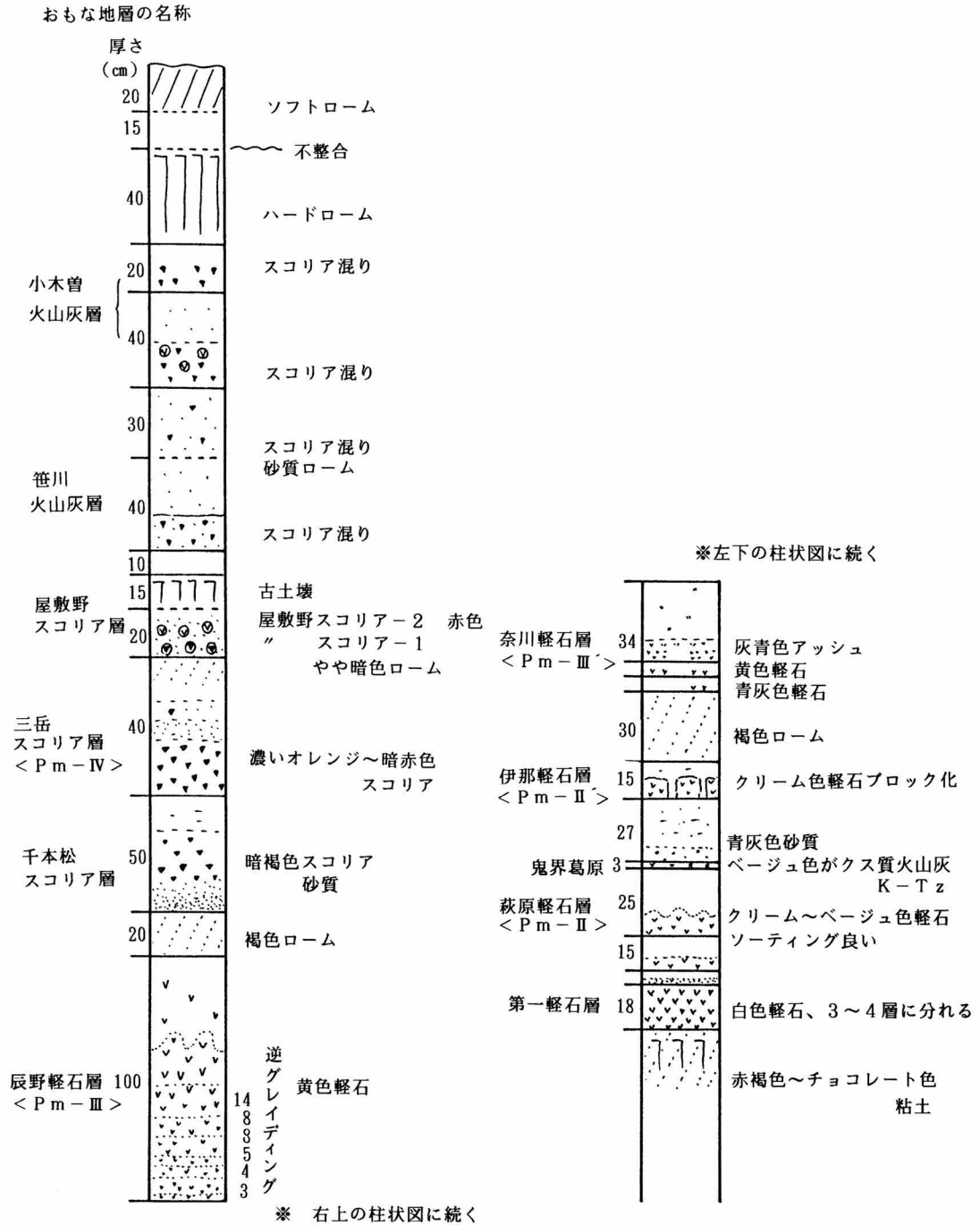
2. 荒神山のテフラ断面との比較

調査地点の地質断面は角礫質斜面堆積物がおおく、テフラの風成層が少ない。トレンチ内において、辰野軽石層から三岳スコリア層がほぼ確実に確認できたものの連続した御嶽テフラの断面は得られなかった。そこで、連続した風成テフラ断面が観察できるところで、調査地点にもっとも近い荒神山の調査結果を示し、(第4・5図)、両者を簡単に比較しておく。

荒神山南側のグラウンドにおいて伊那谷北部における新期御嶽テフラ層の全断面が観察できる。このうち、第一軽石層から奈川軽石層までは辰野高校のトレンチで見ることができない。辰野軽石層より上部が観察できる。調査地点ではソリフラクションによる斜面堆積物の中に辰野軽石・千本松スコリア・三岳スコリアがはさみこまれている。辰野軽石層の年代は6.6~6.8 万年前(竹本ほか1987)と推定されている。このことから、上の山遺跡を中心とする湯舟面においては6.6~6.8万年前ころから三岳スコリアの年代である 5.7万年前ころ、楡沢山側からの扇状地形成が活発におこなわれていたことが判明した。



第4図 荒神山のテフラ露頭のスケッチ(竹本ほかによる)



第5図 荒神山のテフラ・柱状図（荒神山南麓グラウンド）

3. 伊那市横山の地質断面との比較

伊那市横山の不燃物処理場において厚さ20mの地層の断面が観察できる。横山では山麓に位置するため地層全体がソリフラクションの影響を強く受けた産状を示している。辰野高校での乱雑な堆積物とよく類似している。典型的にソリフラクションの影響を受けている横山での調査地点での様子とを比較して考察してみる。

横山では辰野軽石層から顕著なソリフラクションを受けている。厚さ 120cmほどの辰野軽石層が大きく角礫状に分割し、その間を充填している堆積物は火山灰を主とし、礫や軽石片を乱雑に含む二次的な堆積物である。さらに、三岳スコリア層の上位において凍結上昇による礫の立上りを示しており、気圧低下を示す確かな示標となっている。

辰野高校トレンチの地質断面においても横山の産状と共通する点がおおい。第一は、辰野軽石層の礫状化である。次は、辰野軽石層堆積後から千本松スコリアの降下後まで、崖錐性の角礫層がくりかえし重なっている。また、三岳スコリア層の堆積後までソリフラクションによる地層の攪乱が続いている。

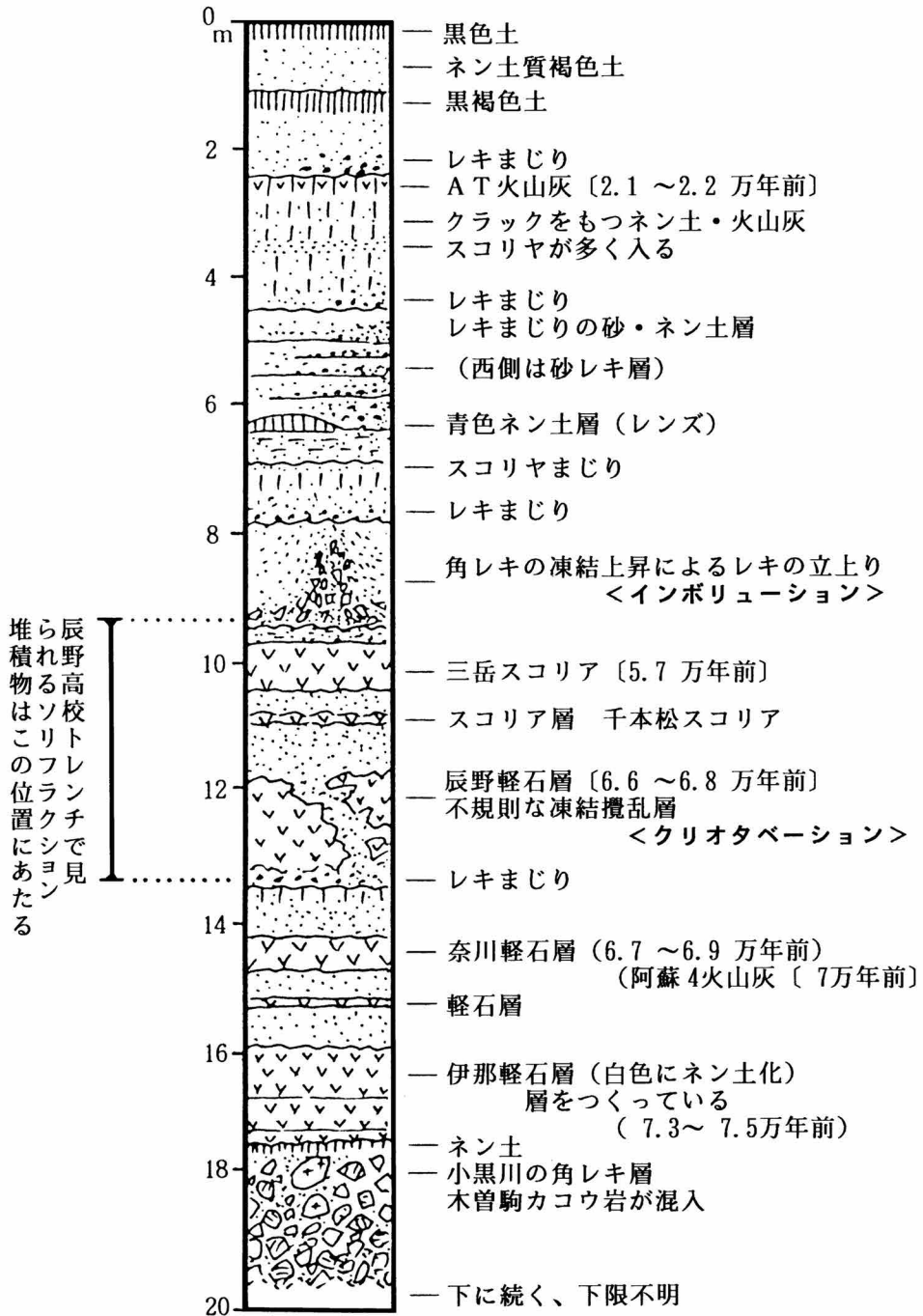
4. 自然環境のうつりかわり

御嶽第一軽石層の降下期にあたる 8～9万年前ころは、楡沢山からの扇状地がさかんに造られ湯舟面をつくる15～30mの礫層が堆積している。この扇状地形成は山麓線を描く山麓断層群の出現と楡沢山の上昇が活発になってきたためである。

辰野軽石層降下期の7万年前ころから三岳スコリア層降下期の5.7万年前ころは気候寒冷化に向い、楡沢山の斜面から供給される角礫がひんぱんとなり、氷河周辺気候下での扇状地形成が活発になった。

三岳スコリア層降下期より以後においては、横川－辰野断層の活動期にはいり、湯舟面は断層によって持ち上がり、段丘状の台地が出現した。台地の縁は横川－辰野断層による断層崖が20～10mの比高をもってあらわれ、横川川や天竜川に沿う沖積低地より一段と高い台地を形成した。台地化に伴って、三岳スコリア層以降における崖錐性角礫の供給は湯舟面全体をおおうことができなくなり、トレンチ周辺においては新規御嶽火山灰やスコリアの風成堆積物と斜面を流動する二次的堆積物とが混り合うようになって最終氷期の極相を経過した。

(松島信幸・寺平宏)



横山の地層柱状図 ([] は竹本ほか1987による年代値、単位：万年)

第6図 伊那市横山の地層断面図

第3節 歴史的な環境

辰野町宮木地区は遺跡の稠密地帯で、低位から高位の段丘上には大規模な遺跡が櫛比している。町内最大級の前田遺跡をはじめ、重要な遺跡も多い。以下、小横川川南から新町北部付近にかけての遺跡を概観しながら、この地区の歴史的な流れをおってみたい。

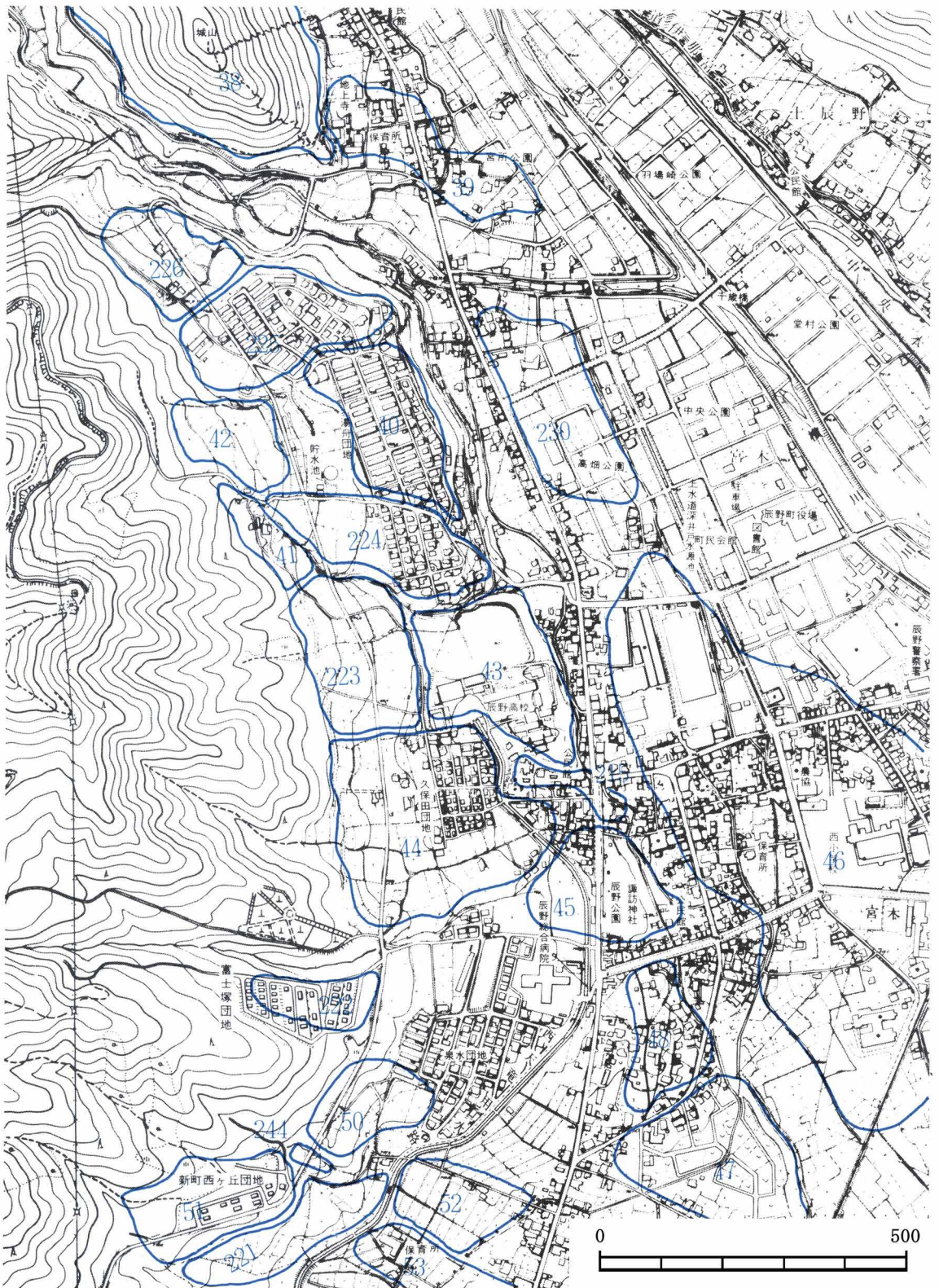
縄文時代の遺跡としては第8図の殆どが該当するが、中でも^{くぬきばやし}懈林遺跡は昭和61、63年に発掘調査が行われ、縄文時代早期の押型文土器を出土した住居址や集石炉が発見された。続く縄文時代前期は楡沢山麓遺跡として古くから知られていた遺跡があり、前期末葉の土器片が多量に採集されている。また同じく山麓の懈林遺跡では前期末の小竪穴が出土しているほか、中期初頭の小竪穴群が発見された。その他にロームマウンドも数多く出土している。中期中葉の時期は今までのところ目立った遺構、遺物の出土はないが、懈林遺跡で復元可能な土器2点を採集している。中期後半の遺跡としては、前田遺跡がある。この遺跡内の春日電機（株）工場から中部電力変電所付近一帯で、曾利式土器多数が採集されているという。なお、富士塚北遺跡では縄文時代中期ごろと思われる狩猟用の落穴遺構数基が発見され、一帯の遺跡立地にひとつの示唆を与えた。

縄文時代後期の遺跡としては泉水遺跡があり、県宝指定となっている加曾利B式の土偶が出土している。また、近接する懈林遺跡では同じく加曾利B式期の土偶片と土器が発掘されている。縄文時代晩期の遺跡は町全体でもきわめて少なく、樋口五反田遺跡で配石墓と土器が出土している例がよく知られている（註1）にすぎないが、上原遺跡では晩期らしい土器片が発見されている。

弥生時代の遺跡は、宮木地区一帯では今のところ殆ど見当たらないが、上の山遺跡の第1次調査で細片がわずかに出土している。今後新たに発見される可能性が十分ある。続く古墳時代の遺物も皆無に近い状態だが、かつて古墳らしいものがあつたと伝えられる所が1ヶ所ある。

次の奈良、平安時代の遺物が出土している遺跡は多く、殆どの遺跡で平安時代の土師器や須恵器の破片が採集されている。諏訪神社境内地を含む月丘の森遺跡では、古くから土師器等が採集されており、前田遺跡でも昭和40年代初めの辰野西小学校校舎改築中工事には多くの土器が出土したと言われ、詳細は不明だが土師器、須恵器であった可能性がある。また、こうした段丘上の大きな遺跡とは対照的に、山麓にも平安時代の遺跡があり、富士塚東遺跡は急傾斜地に立地し、土師器等遺物も多く出土している。なおこの時代町内には官牧として平井手、宮所両牧が設置されており、特に宮所牧とこの宮木一帯の遺跡との関連は今後十分検討すべき課題であろう。

さて、城館跡としての上の山遺跡と関係の深い付近の中世以降の遺跡は、小横川川をへだてて北側に竜ヶ崎城址がある。北方の山地から文字どおり竜の首のようにつき出た山を利用して山城が築かれており、山頂には土塁がのこっていて、その北と南の尾根上や山腹には数本の堀切が見られる。この竜ヶ崎の地名についてはすでに、『守矢満実書留』寛正5年（1464）に、「宮所竜ヶ崎之城」『諏訪御符札之古書』長享元年（1487）に「りうか崎之城」とあり、『高白斎記』は、天文14年（1545）6月の武田信玄伊那進攻の際、福与城の藤沢頼親援護のための小笠原長時勢の陣場となったことを伝えている。ところで、『伊那温知集』によれば「弘治天正の頃郷士矢島勘六其子勘兵衛居住の後今以天白之小城と云在」とあり、上の山の地は江戸時代にすでに「天白之小城」と呼ばれ、戦国時代末期には矢島氏の城館であったと伝えている。矢島勘兵衛はいわゆる寛永年間の上伊那十三騎のひとり、寛永13年（1636）の高遠城主保科正之の出羽山形転封の際、従って行ったとされている。（註2）



第 8 図 周辺遺跡分布図

なお、天和3年(1683)には、伊那街道の宮所宿と新町の相宿に代わって宮木村が継立宿となり、以後宮木宿が成立し、今日の宮木の集落を形成するに至った。(註3)

地名 第7図は明治22年の土地台帳による地名だが、宮木地区の歴史を知る手がかりになりそうな地名も多い。「要害」は城館跡と直接関係がありそうで、元禄3年の検地帳には「やうかい」と記されている。「湯舟」「神田」などは諏訪神社との関連が考えられる地名で、やはり元禄検地帳にも見える。「サンゲナシ」もやはり元禄検地帳に「さけなし」とある。また、「平蔵」は意味がはっきりしないが、平出の辰野東小学校付近には「半平蔵」という地名がある。

NO	遺跡名	縄文時代					弥生時代	古墳時代	奈良平安	中世以降	備考
		早期	前期	中期	後期	晩期					
38	竜ヶ崎城址								◎	別称、小城、・城山	
39	タッ所			○							
40	湯舟			○				○			
41	楡沢山麓		○	○				○			
42	湯舟西			○							
43	上の山	◎	◎	◎			○?		◎	昭61、62、63、 発掘調査	
44	久保田			○				○			
45	月丘の森							○			
46	前田			○				○			
47	上原			○		○?		○	○		
48	天狗坂			○							
50	富士塚東			○				○			
51	榎林	◎	◎	◎	◎					昭61、63、 発掘調査	
52	泉水				○					整地調査	
53	泉水南							○			
215	長久寺下			○				○			
221	榎林第二	○		○							
222	富士塚北			◎				○	○	昭57、発掘調査	
223	滝洞			○					◎	昭60、発掘調査	
224	南湯舟			○				○	○		
225	北湯舟A			○				○?	○		
226	北湯舟B			○					○		
230								○			
244	木戸脇				○						

周辺遺跡一覧表 (○は遺物出土、◎は遺構出土を示す)

第三章 発掘調査

第1節 調査の方法と調査結果の概要

今回の発掘調査地点は、昭和61年 7月、8月に行った第1次調査教室棟調査区の南に隣接するところで、第1次調査の結果から縄文時代や中世の遺構の出土が予想された。このため、旧校舎取り壊しの際には、地下の遺構、遺物が新たに破壊されないよう、廃材等の土中への埋納あるいは、地下構造物の撤去を避けた。

第4次調査対象箇所は道路と校舎建設の面積が 1,125㎡と中規模であり、第1次地調査の際に土層の状態もある程度把握していたので、事前に試掘調査は行わず、最初から対象地全面の発掘調査を行うこととした。グリットは 2m四方とし、第1次調査から第3次調査までのグリット設定を合わせる予定で進めたが基点がはっきりつがめず独自に校舎建設の設計図に合わせ、南北方向はアルファベットを、東西方向に数字を用いて標記した。また標高は標高値が求められている工事用のベンチマーク (753.187m) を基準点として使用した。

上の山遺跡内は、大正元年の伊北農蚕学校創設以来、伊北農商学校の時期や、辰野高等学校とってから増改築工事が何回か行なわれ、第1次調査の際にもその当時行なわれた傾斜地の削平や盛土が認められていたため、調査時の表土除去は盛土と思われる箇所を中心に重機を使用し、以下は手作業で進めた。遺構の所在の確認まではジョレン等を用いて掘り下げ、遺構内の排土には移植ゴテなどを使用した。なお土坑、小竪穴などは半カットの状態掘り下げ、住居址は土層あぜを残すなどし、遺構内の土層の観察と記録につとめた。

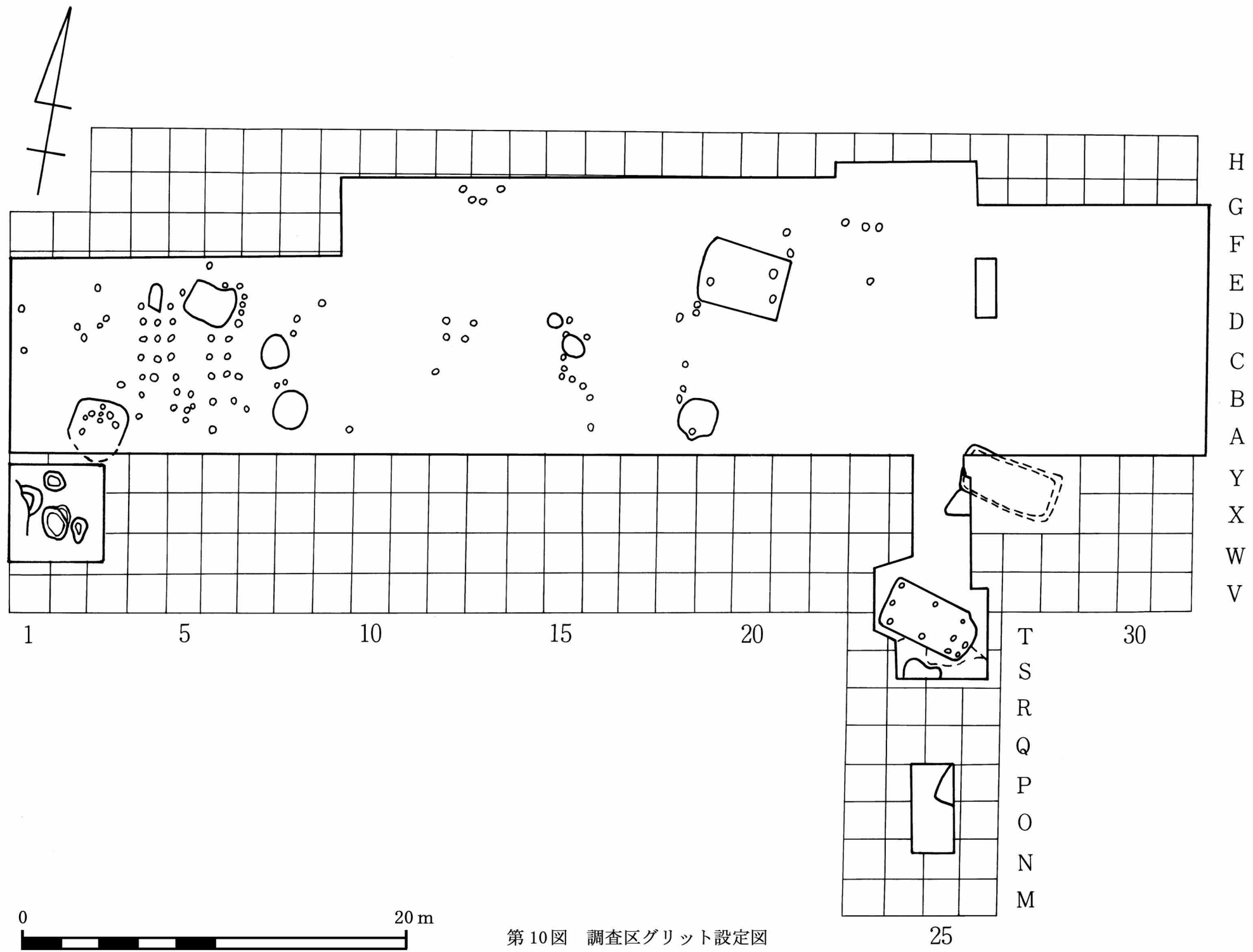
本調査区は旧校舎建設の際に遺構等も一部破壊されており現場における作業も非常に時間がかかった。また遺物の出土数は調査面積、遺構の数量から比較して少なかったが住居地からは中世の時代が確認できる貴重な遺物が出土している。なお地質調査用のピットを掘り地質の分析を行い本遺跡がどのような状態で形成されたか判明した。出土遺物の取り上げは、表土下から遺構確認面まではグリット別、遺構内の遺物は各遺構別に取り上げ、必要に応じて適宜出土位置やレベルを記録し、図化及び写真撮影を行なったものである。整理段階で遺物台帳を作成し、各遺物には遺物番号を記録した。

第4次調査の出土遺構、遺物の概要は次のとおりである。

- | | |
|--------------------|------------------------------|
| 1. 半地下式住居址 1基 (中世) | 6. 土坑 5基 (縄文時代中期) |
| 2. 半地下式建物址 2基 (中世) | 7. ロームマウンド 1基 (時代不明) |
| 3. 掘立柱建物址 2基 (中世) | 8. ピット (小土坑、柱穴) 約90ヶ所 (時代不明) |
| 4. 住居址 2基 (縄文時代中期) | 9. 焼土 4ヶ所 (時代不明) |
| 5. 小竪穴 6基 (縄文時代中期) | |

出土遺物総点数 (土器、石器、陶磁器、古銭) は 500点である。

(田畑)



第10図 調査区グリッド設定図

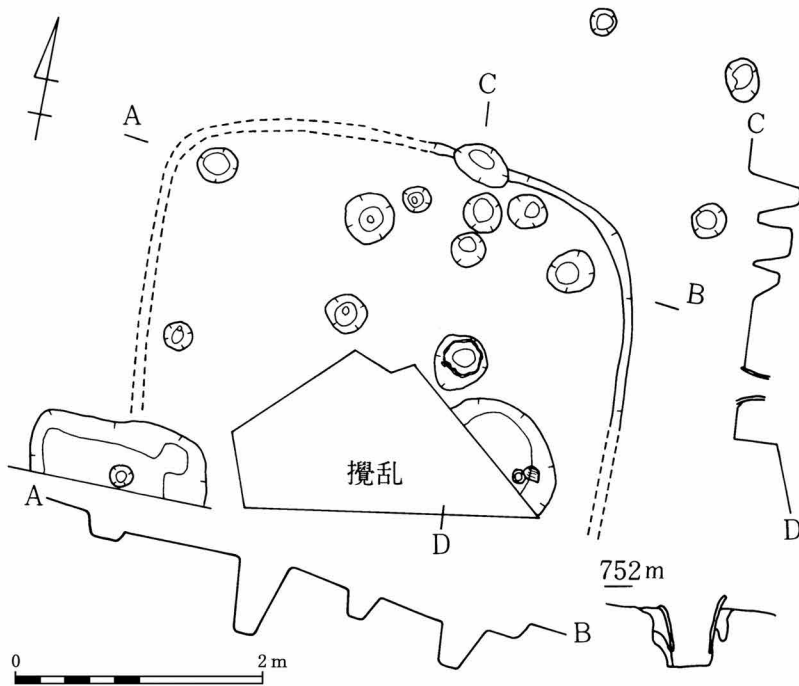
第IV章 調査区の遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

1. 第6号住居址(第11. 12図)

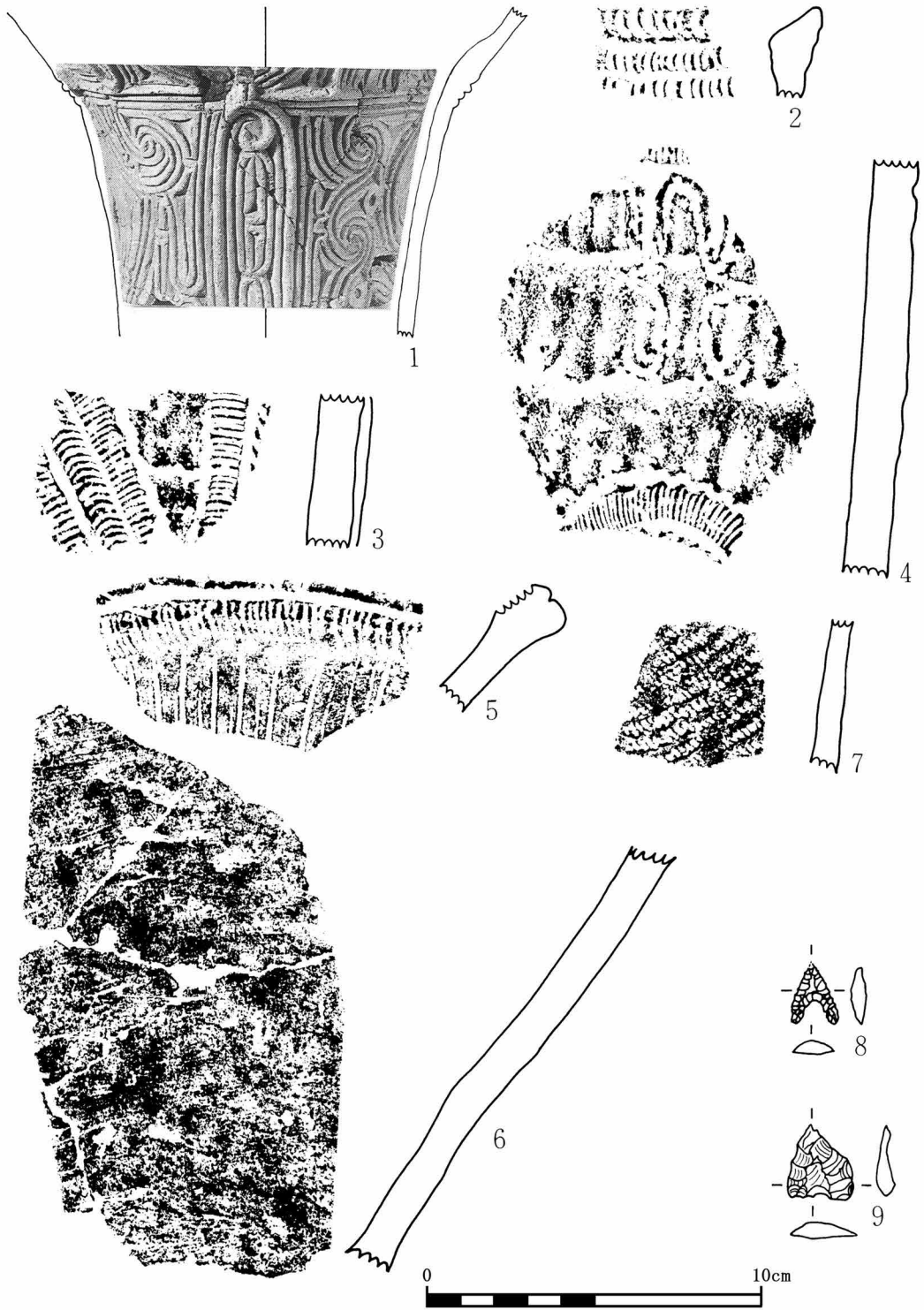
本址は、第4次調査区の西南、A・B-3を中心として検出された。東から西に傾斜する斜面に構築されており、北側のP.1より西と、南側の壁や床面は確認できなかった。尚調査区全体についていえることは、建物構築時の基礎工事による破壊がローム層まで及んでおり遺構の保存状態は非常に悪い。南側のほぼ半分は、バックホーによる土取りのため床面が40cm以上削り取られ爪跡が残っている。かろうじて全体の4分の1残っている。平面プランは、東北のコーナーが残っており隅丸方形の住居址と考えられる。床面は余りよくない。壁の立上りは5~7cmと低く良好な壁といえない。炉は埋甕炉で上下を切断した土器の胴部が埋められている。形状は40×50cmの不正円形で、東壁より1m中央寄りに設けられている。焼土の残存は少ない。柱穴は10個検出された。主柱穴はP. 2・8が想定されるが全体像が不明のため断定できない。11は径110cmを計るが半分が破壊されており、屋外に半分以上でる口と共にこの住居址に伴うかは不明である。

遺物出土量はこの時期の住居址にしては少ない。第12図の1は、埋甕炉の土器である。器面を半截竹管による曲線と三角形印刻文で構成されている。2は、口縁部、3・4・6は、共に胴部、5・6は、浅鉢の胴部である。共に勝坂様式、藤内様式の土器である。8・9は、黒曜石製の石鏃である。時期は、中期中葉である。



第11図 6号住居址遺構平面図

埋甕炉断面図 1:20

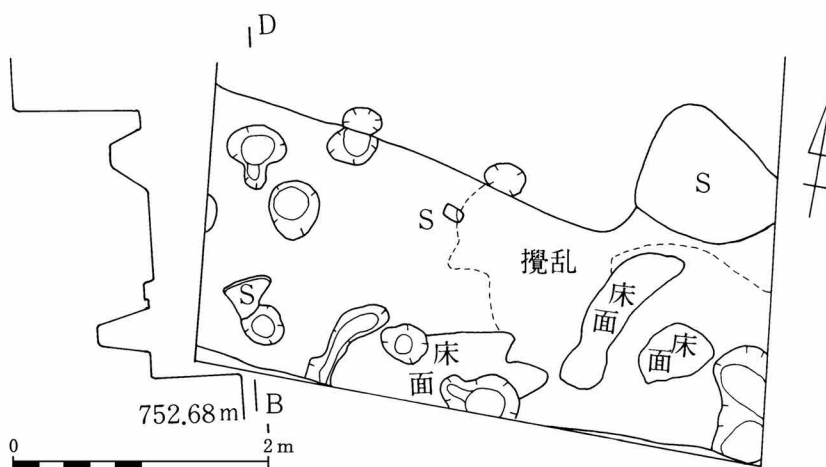


第 12 图 第 6 号住居址遺物

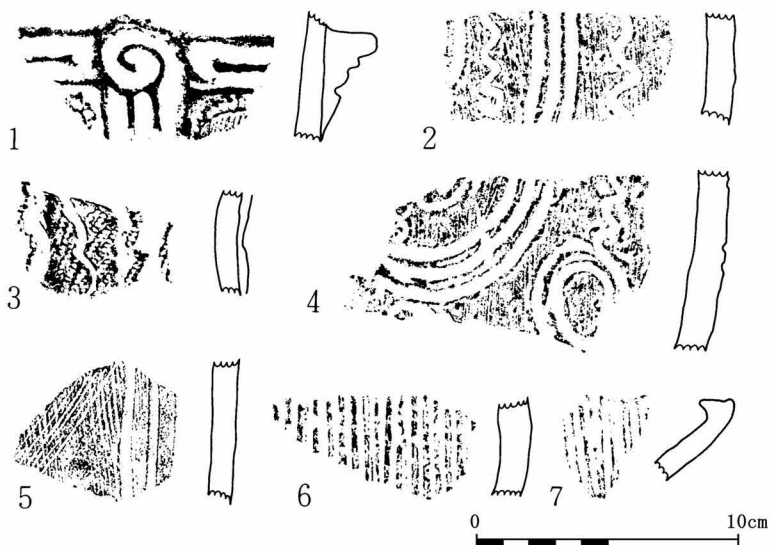
2. 第7号住居址 (第13.14 図)

本址は、調査区の東南S・T-24~26に検出された。第1号建物址と既説の建造物によりプランの全容を検出することができなかった。東西は調査区外となり、南側は渡り廊下があり、北側は第1号建物址により切られている。床面も荒れており三ヶ所の床面が確認された。柱穴も6個検出されたが主柱穴等は不明である。炉は、この時期では石囲炉と考えられるが調査区域内には無い。

遺物、土器片ばかりで、第14図・1~7が出土している。中期後葉のものである。石器の出土は無い。



第13図 第7号住居址遺構平面図



第14図 第7号住居址遺構平面図・覆土遺物

3. 第33号土坑（第15図）

本址は、C-15に検出された。長径 1.6m 前後の不正だ円形で、ロームの掘込みは 8cm 前後である。西側は破壊されている。底に18cmの礫が入っている他遺物の検出はない。

4. 第34号土坑（第15～17図）

本址は、D-15に検出された。長径 1 m、短径 70cm のだ円形でロームの掘込みは 45cm 前後を測る。形態は袋状を呈す。底部は遺物の存在で確認できる程度で良好とはいえない。

遺物、小さな土坑にしては遺物の量は多い。第17図・1～5は同一個体と考えられ口縁部から胴中央部にかけての破片である。6 は、表裏に条痕のある早期末の土器である。7 は、いわゆる中越様式の土器である。第17図・4は、第16図・1～5の土器と同じ梨久保様式の口縁部である。

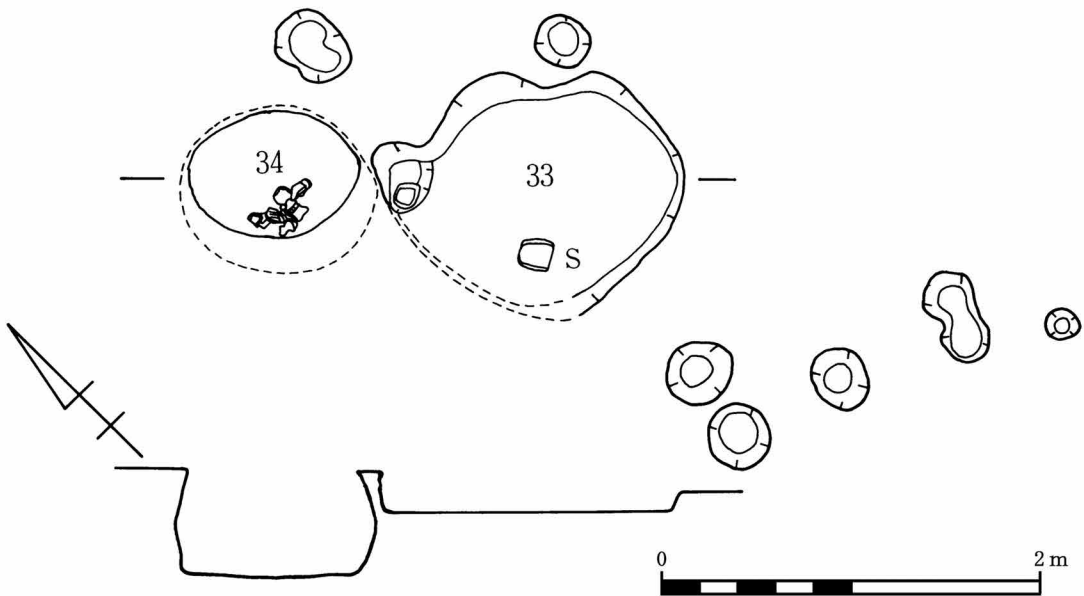
5・6は、厚手の土器で、浅い斜縄文を地文に、胴上部に隆帯を指先で抓む帯を付けた土器である。以上が土坑内の土器で 6・7 をのぞき中期初頭のものである。

第17図・8は、土坑33号の東側の小ピットよりのもので、早期末か前期初頭のもと考えられる。

第17図・1・2・3・7は、第8号住居址の覆土中よりのもので、1 は、前期末葉のものである。2・3 は、中期中葉のもの、7 は、中期後葉のものである。

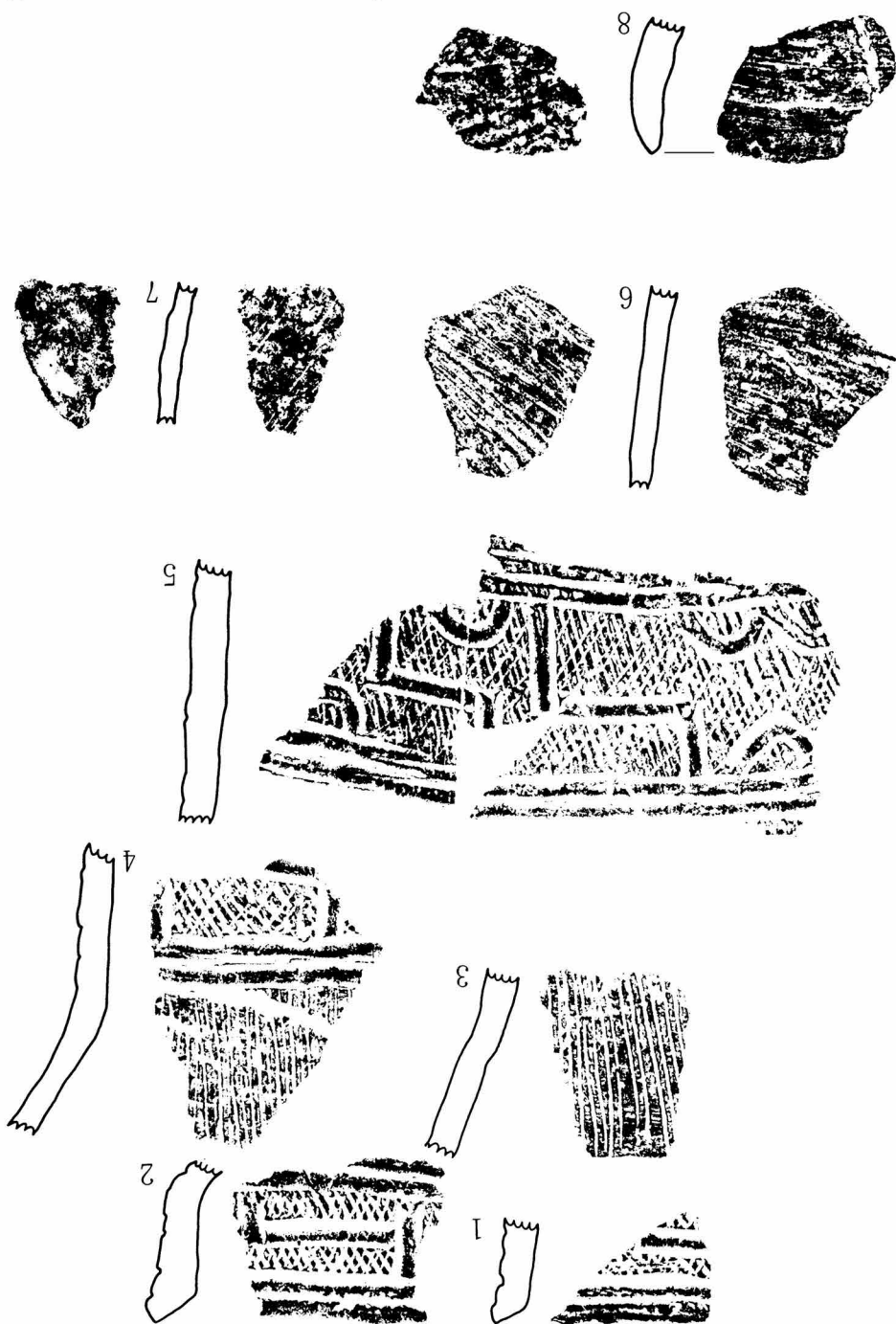
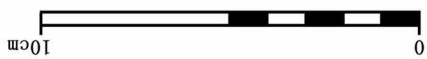
第3号土坑の南側にある5個のピットは、柱穴の残欠とおもわれるが、南側の破壊がひどくどのような形態のものか不明である。

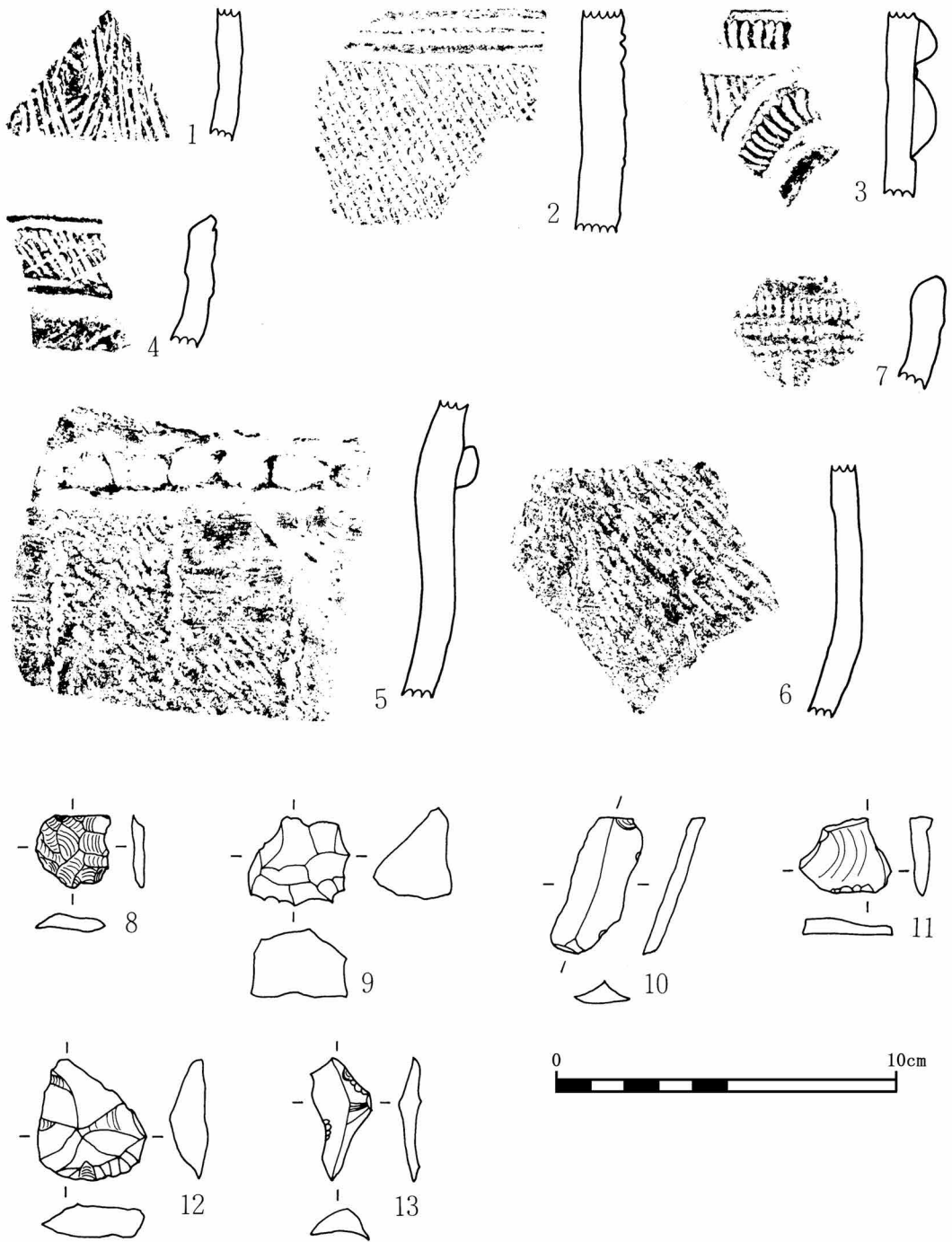
石器、第17図・8～13は、共に黒曜石製で剥離痕のある石器である、第8号小竪穴付近の覆土より検出されたものである。



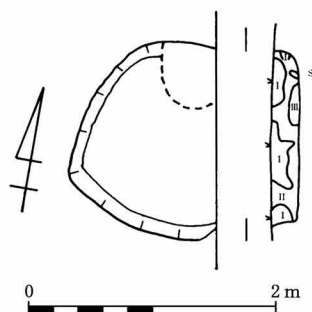
第15図 第33・34号土坑遺構平面図

第16图 第34号土坑出土遺物



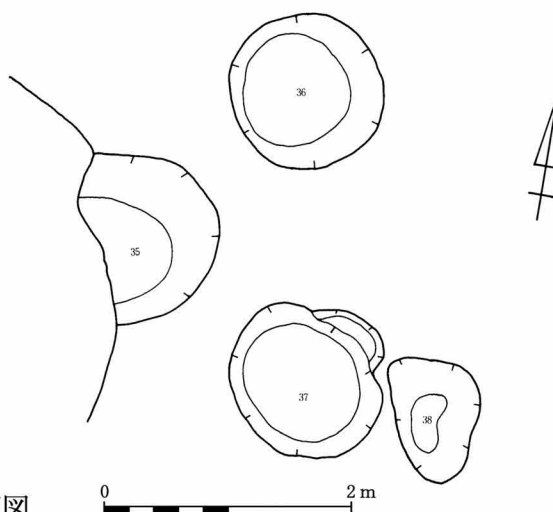


第 17 图 第 34 号土坑出土遺物



- I 暗褐色土ローム粒混り
- II 暗褐色土黄粒混り
- III 暗褐色土炭化粒混り

第 18 図 第 7 号小堅穴遺構平面図



第 35・36・38 号土坑遺構平面図

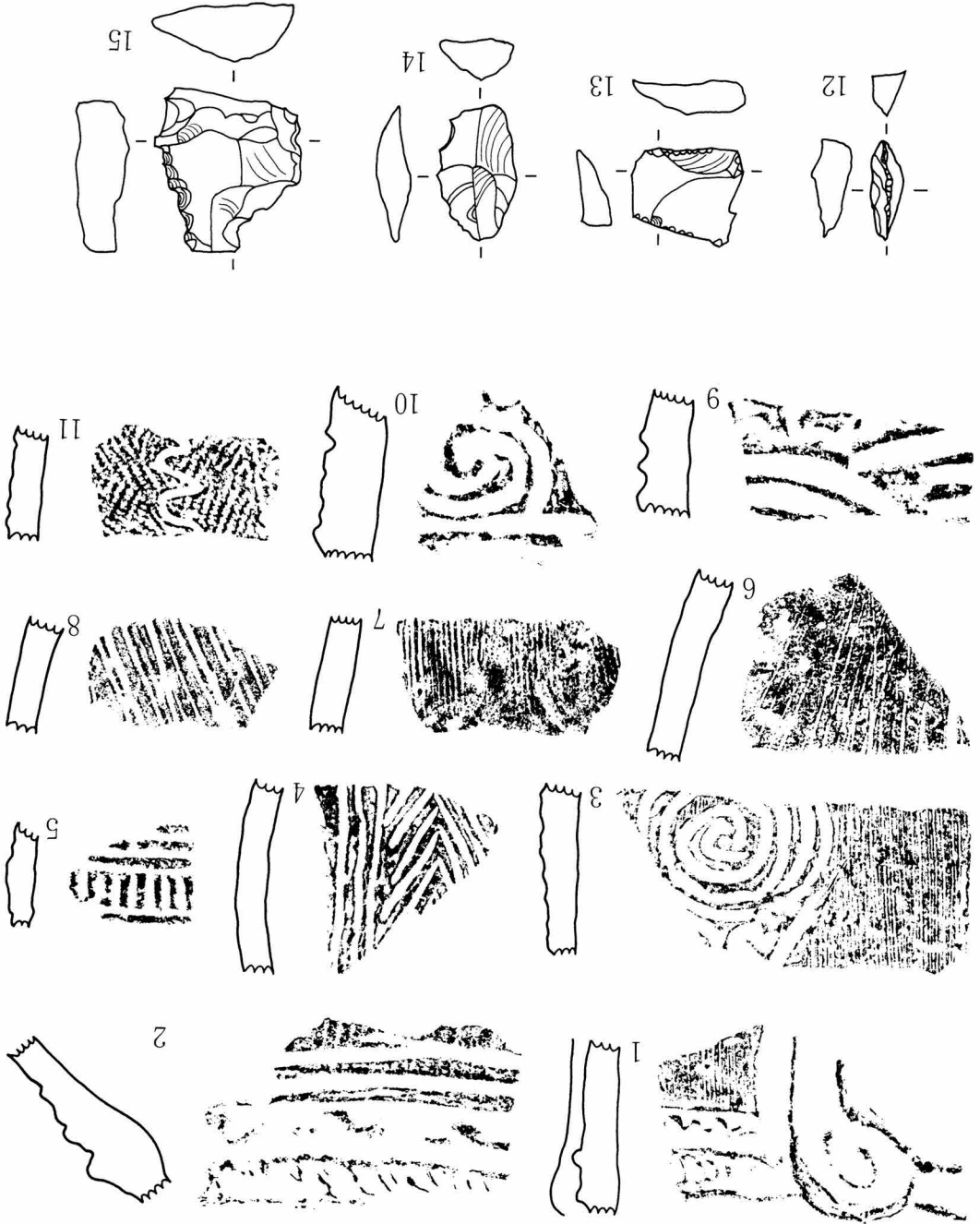
5. 第 35・36・37・38 号土坑

本址は、W・X・Y-1・2 に検出された。第 36・37 号から縄文中期後葉の土器の小破片が出土した。

土器・第 19 図・1~11 は、A・B-14・15 付近よりの出土で、この付近は破壊がひどく、テフラ上面が荒れており、床面及び壁の痕跡は無く、数十片の縄文中期後葉の土器片が出土した。土器の出土量からみて住居址の存在が考えられるが遺構の検出が出来ず遺物を提示するにとどめた。

石器、第 19 図 12~15 は、後述する中世の第 8 号住居址の覆土中より出土した石器で、共に黒曜石製である。

第19图 第8号住居址出土遺物



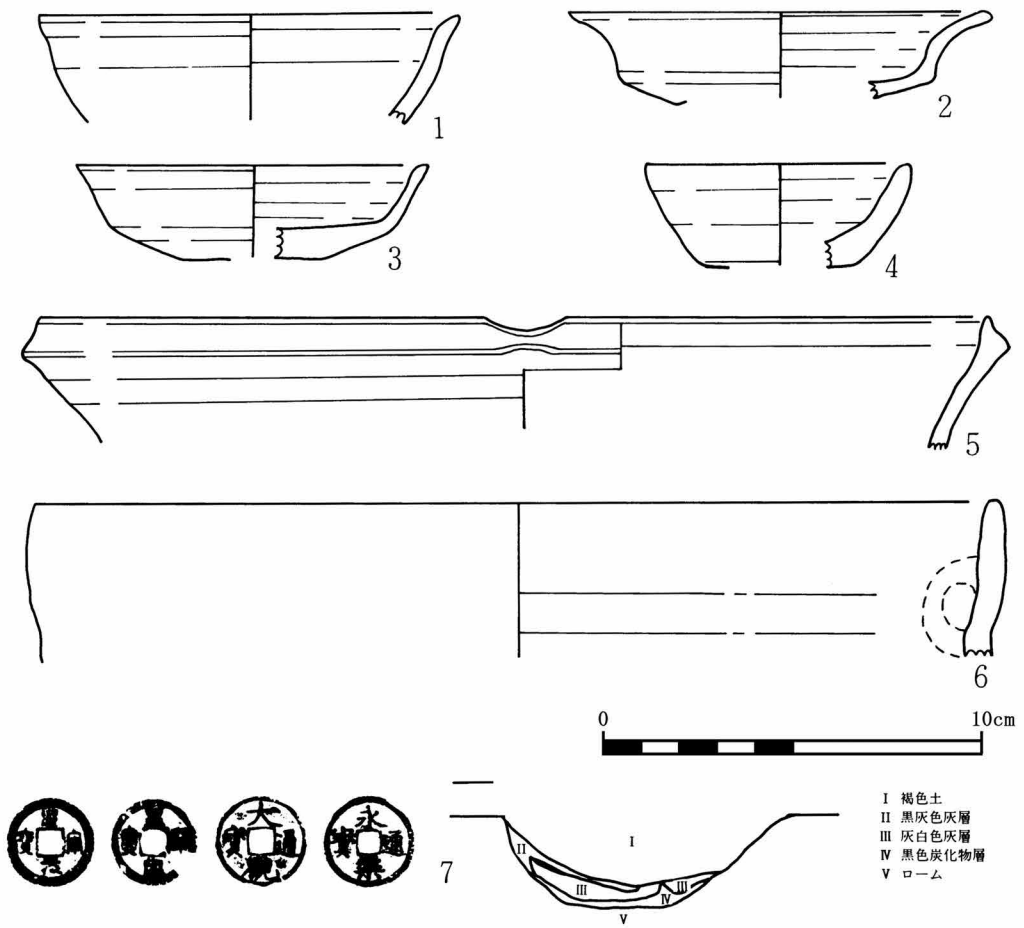
第V章 中世の遺構と遺物

第1節 中世の遺構と遺物

1. 第8号住居址(第20~22図)

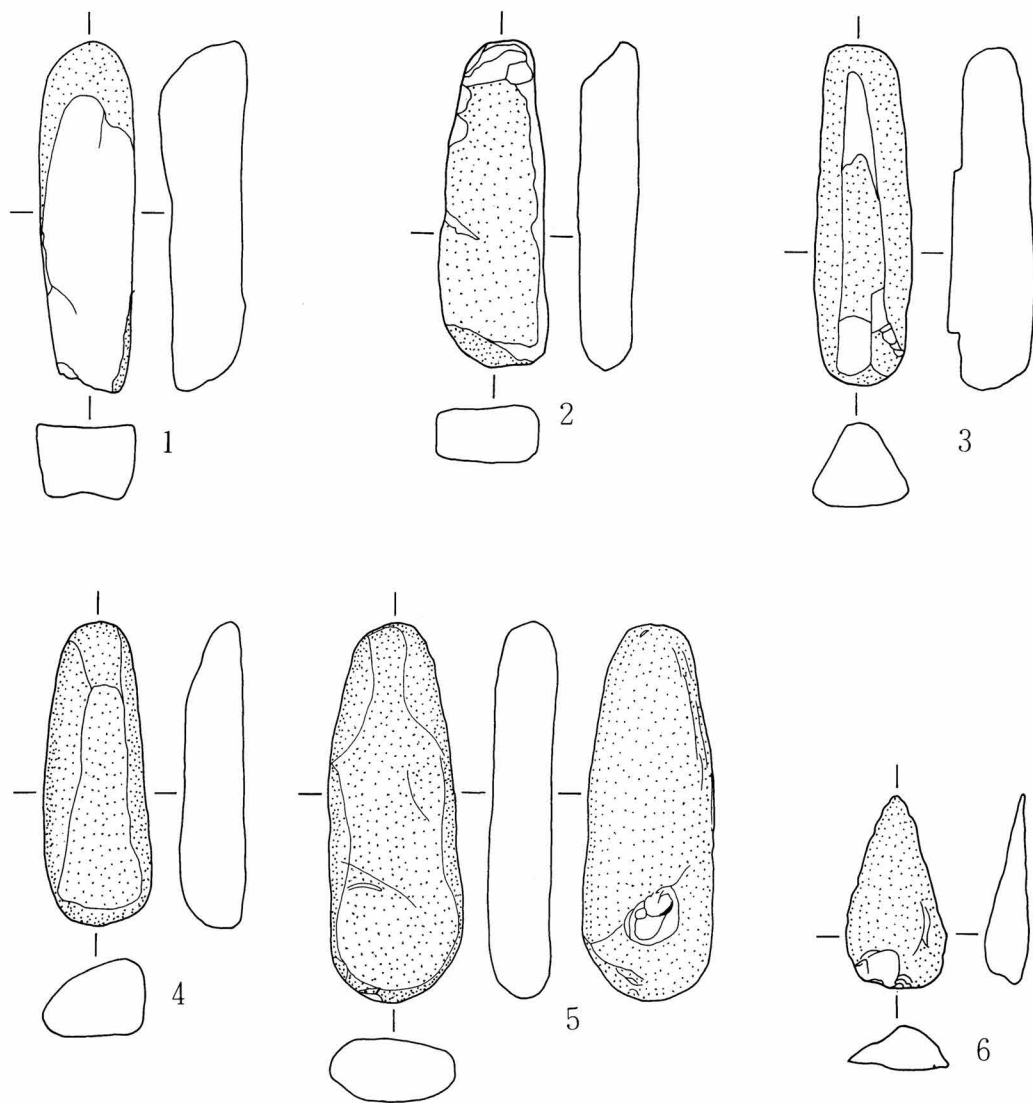
本址は、調査区を中心やや北東にあり、E・F-19・20を中心とした付近に検出された住居址である。この付近は基礎工事による破壊が特にひどく覆土発掘中40cm下よりコンクリートの下部に相当量の大量のグリ石を敷いた床が現われ遺構では無いのではないかとおもわれたが、コンクリートの床の切れる部分に黒色土があり掘込みの深いことが確認された。コンクリートの床、グリ石を取りはずしさらに下部へ掘り下げると、相当量の人頭大前後の礫が数十個投げ込まれておりその礫周辺より内耳土器片の出土があり中世の住居址と確認した。プランは、東西4.55m×南北3.65mの長方形である。床はよく敲き締められている。北東部コーナーと南西部コーナー及び中央部付近に巾20cmから30cm、深さ10cm前後の溝がある。壁は、この付近は上記したように荒らされておりどの層位から掘り込まれたか不明である。残存するテフラの上面から床まで140cmを測る。壁の状態は良好で、掘込みに使われた道具の刃の跡がくっきりと残っている個所が多く見受けられる。このような状態で遺存したことは壁に別の材料による覆いの存在が考えられる。炉址は北東コーナーより60cm中央寄りにあり、径80cm前後の不正円形で播鉢状に掘り込まれている地床炉である。炉には4層の堆積がみられ灰層も3層の重なりがある。柱穴は床面上に5個検出したが、南壁より中央へ1.3mのところと東西に直線上並んでいる、主柱穴は1と5と考えられ他は補助的な柱穴であろう。他に北東コーナー近くの壁の中に1個、同コーナーより北へ40cmのところと深さ10cmのもの1個、南西コーナーに接して深さ10cmのものが2個ある。遺物は、出土量は少ない。床面近くに集中しており天目茶碗の破片は北東コーナー壁直下の床面上から出土した。遺物、第20図1は、天目茶碗の口縁部で、口径11.4cmを測る釉はよく融けて美しくかかっている、やや黒味の多い褐色の鉄釉である。2は推定口径11.5cm前後で、体部の形状は、下方に稜があり、上方に大きく外反する。高台は欠落しており不明である。釉は青白色の灰釉が外の稜近くまで内外面に施釉されており高台付近は露胎である。3は、推定口径9.5cm前後で、体部が内湾気味に立ち上るもので、口端部が外反する皿である。底は糸切りであり、灰釉が口縁部に施釉される。4は、推定口径7cm前後で、胎土は内耳土器に近いもので無釉である。5は、播鉢の口縁部の破片である。胎土は軟らかい感じで色調は卵殻色をおび、ざんぐりとしたものである。6は、内耳土器の口縁部である。他に2の釉とよく似た青緑釉が内面にかかった輪高台の破片がある。古銭は、4枚出土しており、大観通宝は床面から80cm上部の出土、他は床面近くで検出された。鑄造年代は住居址の時期とは関係ないので略した。最近このような遺構が検出されるようになった。駒ヶ根市遊光遺跡第9号住居址は火災により廃絶した住居で用材が炭化して残り上屋復元に貴重な資料を提供してくれた遺構である。本址と共に地床炉を設置しているが、柱穴の配置に大きな相違が認められる、出土遺物はこちらの方が多く生活の匂いを感じられる。遊光9号住居址に示された奈良国立文化財研究所の宮本室長のご見解は、土で覆った陸屋根式の住居とのことであったが、本址では、柱の本数が少なく土を乗せた場合重量にたえることができたであろうかは今後の問題としたい。遺物の形態よりみて16世紀中葉前後の時期と考えたい。

石器は、覆土の下層より6点が出土している。第21図1は泥質砂岩、ホルンフェルス、2・3 チャートに近い変成岩、4. 砂岩、5. 硅質泥岩（ホルンフェルス）、総て菰手石である。5の表面端の近くに打痕が2×3 cmのだ円型に残っており敲打器に使用され、辺縁と先端部が擦られている。6は、縁泥片岩で、ポイント状に作られており覆土中に出土した縄文土器に伴う石器と考えられる。

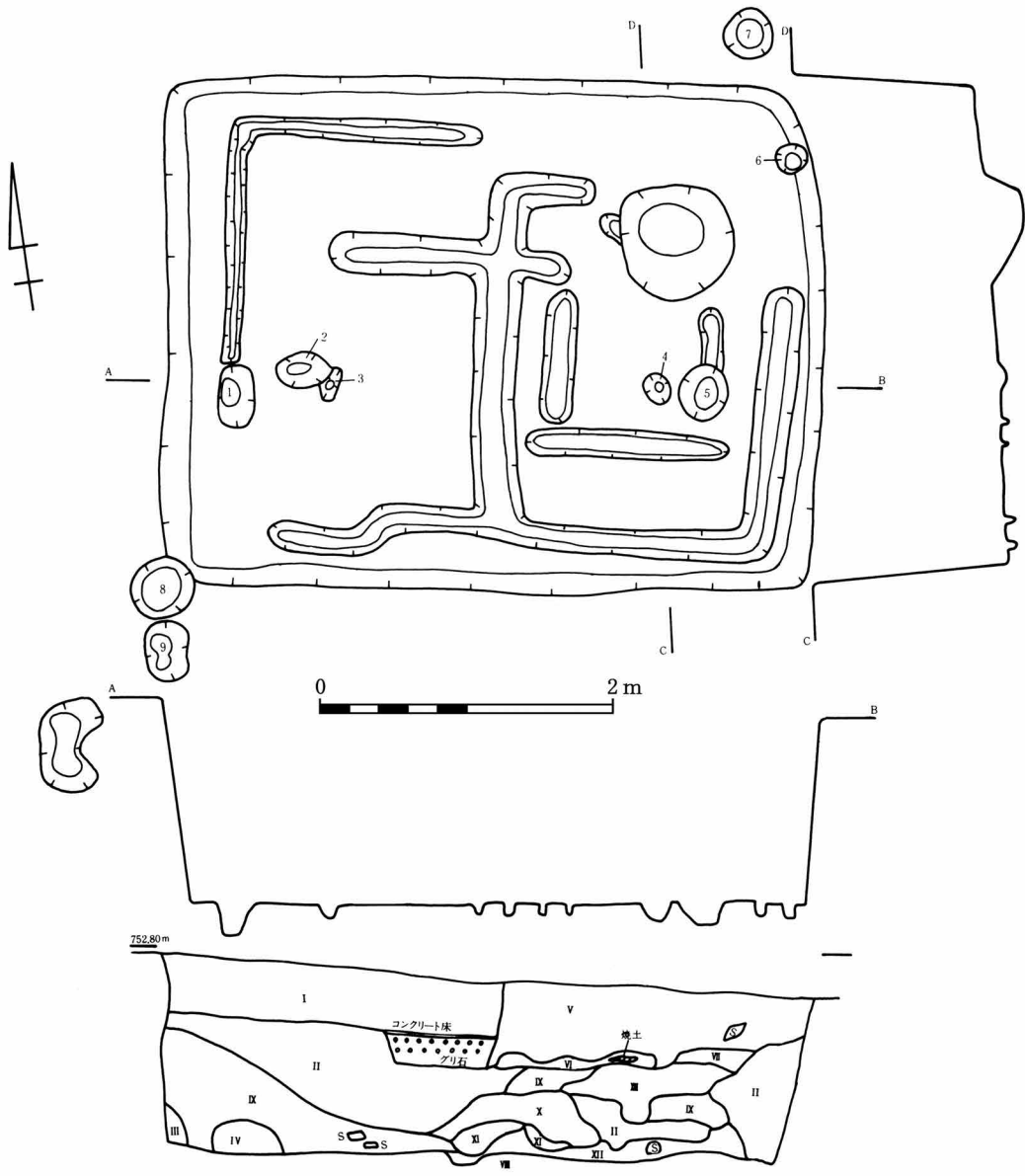


第20図 第8号住居址出土遺物

1:20 第8号住居址炉址断面図

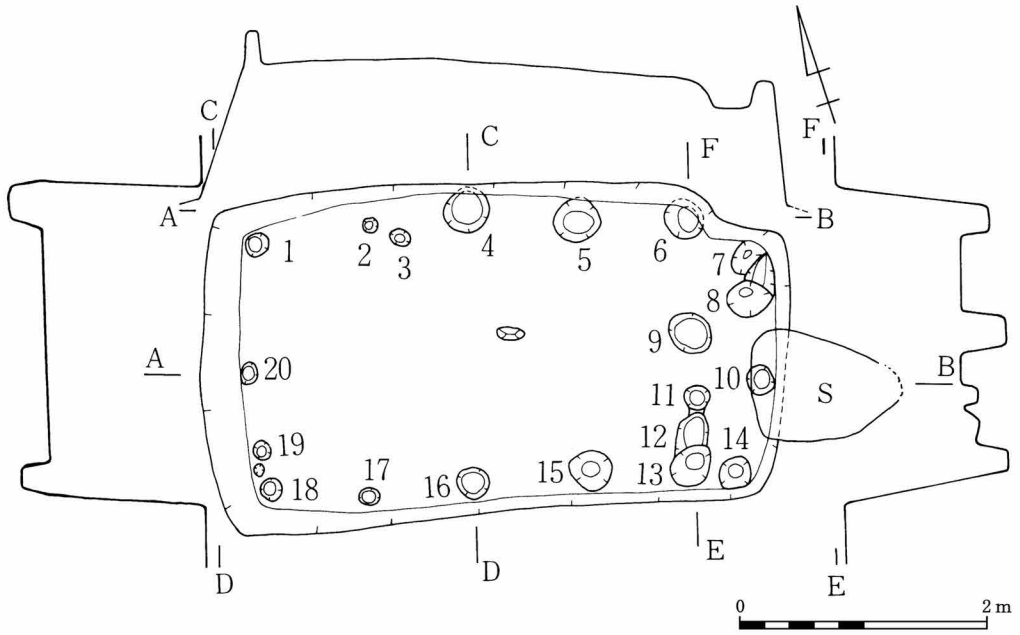


第 21 図 第 8 号住居址覆土遺物

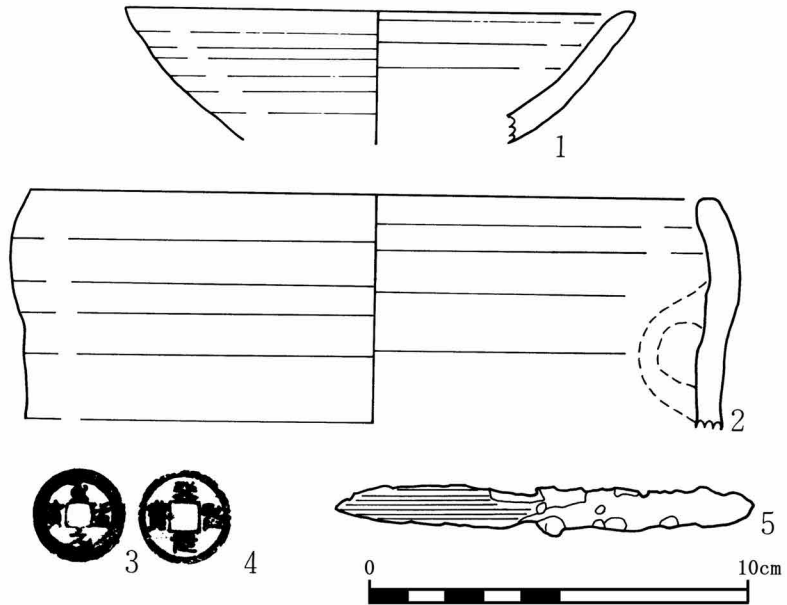


- | | |
|------------------|--------------------|
| I 攪乱 | VIII ローム粒 |
| II 褐色土ローム粒(小)混り | IX 茶褐色土にローム粒(小)混り |
| III 褐色土ローム粒(大)混り | X 暗褐色土にローム粒(小)混り |
| IV " " | XI 茶褐色土ローム粒(小)ツマ混り |
| V 黒褐色に炭混り | XII 黒褐色土にローム粒(小)混り |
| VI 黒褐色土に炭、焼土混り | ■ ローム |
| VII " " | |

第 22 図 第 8 号住居址遺構平面図



第 23 図 第 1 号建物址遺構平面図



第 24 図 第 1 号建物址出土遺物

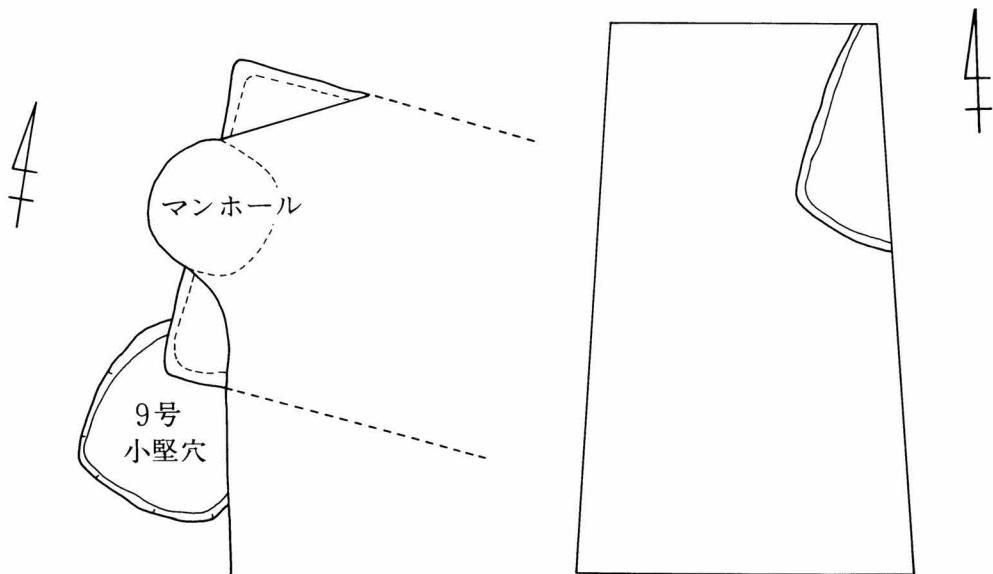
2. 第1号建物址 (第23~24図)

本址は、U-24・25を中心に検出された。今回の調査では上層が余り荒らされず保存された遺構である。プランは、東西 4.8m南北 2.7m、東北隅が少し中へ入るが長方形の建物址である。床、壁共に良好な保存状態である。壁面は第8号址によく似た状態で作られた時点の状態が残っている。テフラ上面からの掘込みも深いところで 130cm前後残っている。ピットも20個を検出した。壁直下を廻るものと、東壁より60cm中央寄りにある9・11が柱穴と考えられる。東壁とP 9・11の間は床面が17cm前後高くなっており入口と考えられる。

遺物、出土量は少なく、第24図1は、復元推定13.8cm前後の口径の灰釉平碗であり胴下半部以下欠落している。2は内耳土器である。3・4は床面近くより検出された古銭である。5は刀子で刀身に木質部が付着しており刀子の形態は不明である。本址は、第8号住居址と構造上に大きな違いがある。炉の無いこと、柱穴の多い点等これだけの柱があれば上に土を乗せることは可能と考えられる。出土遺物よりみて15世紀中葉前後の時期と考えられる。

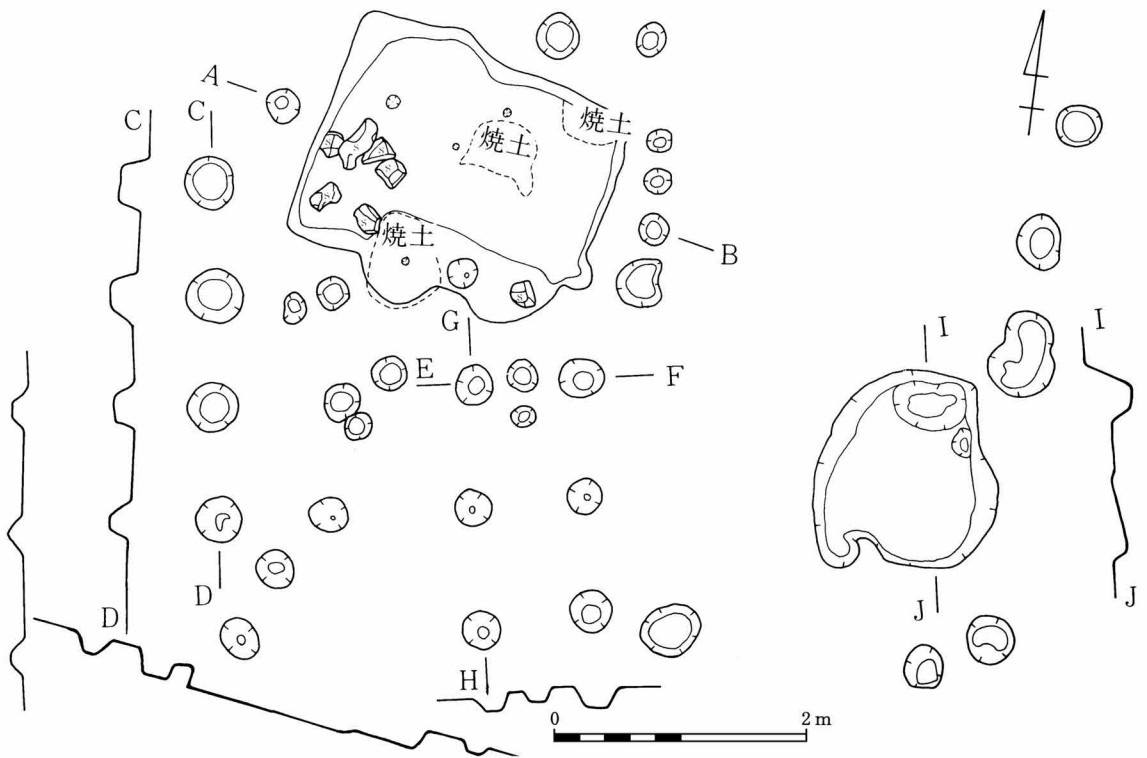
3. 第2号建物址 (第25図)

本址は、Y-26に、1部が検出された。東南と西北のコーナーの部分が調査区にかかり落込みをボーリングして確認した。掘込みは1m以上あり深さ等を考え建物址とした。この遺構の南壁にマンホールが作られており、調査を断念した。

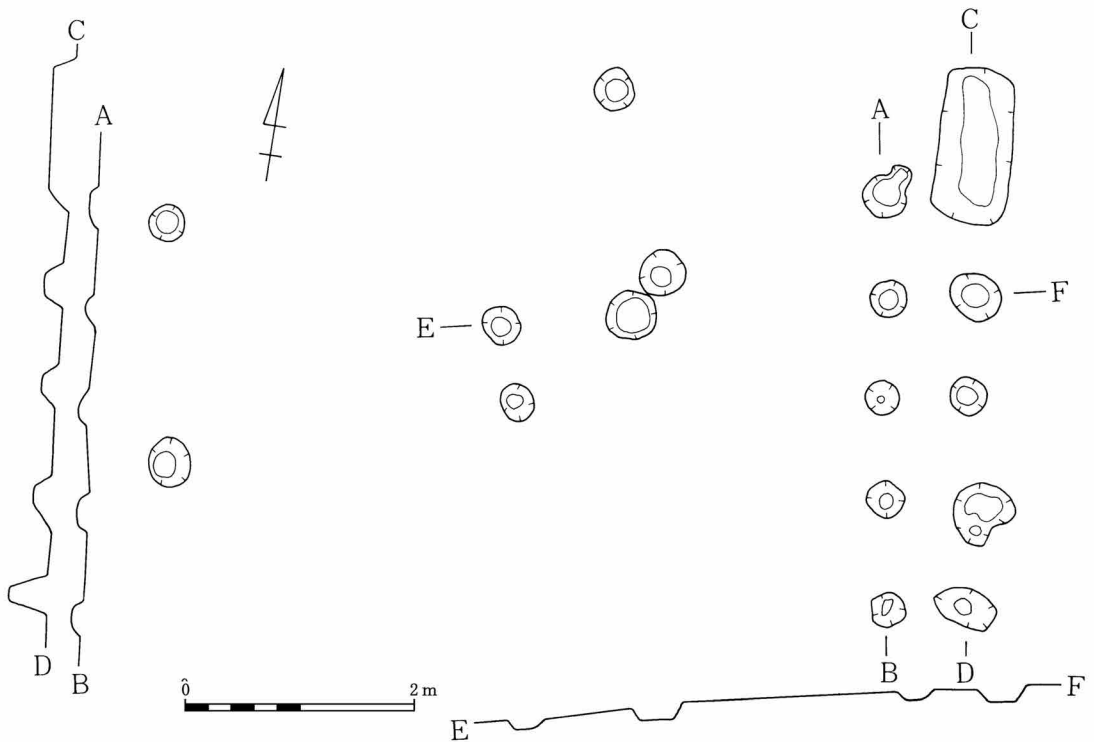


第25図 第2号建物址遺構平面図

第10号小堅穴遺構平面図



第 26 図 第 8 号小竪穴及び付近の柱穴遺構平面図



第 27 図 第 1 号掘立建物址遺構平面図

4. 第7号小竪穴（第18図）

本址は、VW-18・19に検出された。東側は直線的に破壊されており、北壁も攪乱を受けている。プランは、全容は不明であるが残存する部分よりみて径80cm位の方形に近い円形である。掘り込みは浅く10cm前後である。床面はよく締まり良好である。床面近くに黒色の炭化粒が多く混じる層があり火を受けている。周辺にピットがあるが、東と南に深い溝が入りこの竪穴との関係は不明である。

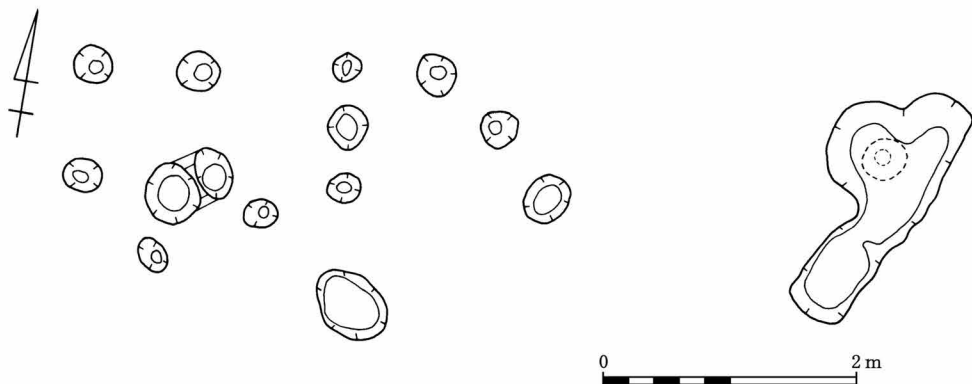
遺物、少量の出土である。図上復元できるものはない。いずれも小破片で、青磁の碗の口縁部が1点、ヘラにより沈線で蓮弁文が画かれている中国製のもので15世紀のものである。内耳土器の破片が1点ある、時期は遺物よりして16世紀と考えたい。

5. 第8号小竪穴（第26図）

本址は、D-5・6を中心に検出された。プランは、東西2.35m、南北1m前後の長方形で掘込みは17cm前後と浅い。15cm前後の礫が南隅と東隅に7個置かれている、焼土も3カ所に相当量残存している。柱穴の中には1個のみで、周辺にある柱穴との関連でこの竪穴のものか不明である。周辺にあるピットがこの竪穴に付属すると考えられるが位置が竪穴とそろわず今後の検討を要する。

遺物の出土量は少なく、青磁の碗の口縁部の小破片が1片あり、ヘラ描きによる蓮弁文がある他に鉄軸が高台部をのぞき内外に施された壺か甕の破片がある。他、縄文の遺物のところに記した黒曜石の石器が出土している。時期は、他の中世の遺構と同時期の16世紀と考えたい。

（木下）



第28図 B-6～12グリット内柱穴遺構平面図

第Ⅵ章 掘立建物址遺構

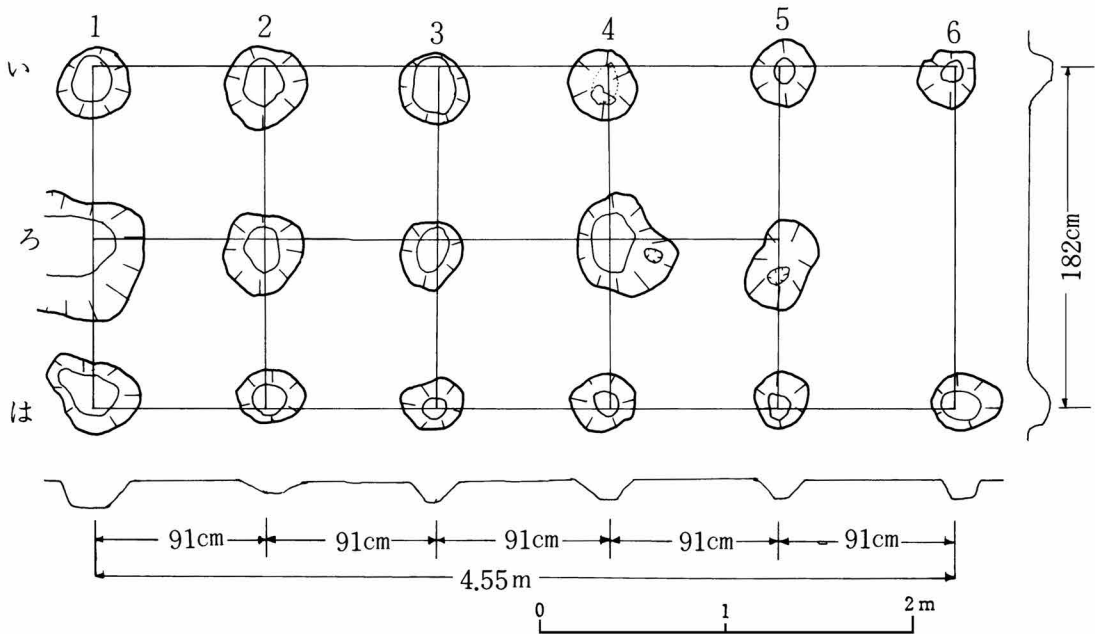
第1節 掘立建物址

第1号掘立建物址（第29図）

1. 第1号掘立建物址

上の山遺跡第4次埋蔵文化財調査区域のC～E-6～7に発見された遺構である。

この建物址の規模は南北4.55m、東西1.82mを測り、この建物址の柱間隔は「は」-6～「は」-5の柱間は柱真芯で91cm、「は」-5～「は」-4は91cm、「は」-3～「は」-2は91cm、「は」-2～「は」-1は91cmである。「ろ」の通りは4～5、3～4、2～3は91cm、「い」の通りの5～6であるが、6は他の遺構で破壊されて不明である。「い」の1～2、2～3、3～4、4～5の間隔は91cmで「い」「ろ」「は」も各91cmとなっている。このような柱間隔からこの建物は東西に1.80m、南北に4.55mの掘立建物である。

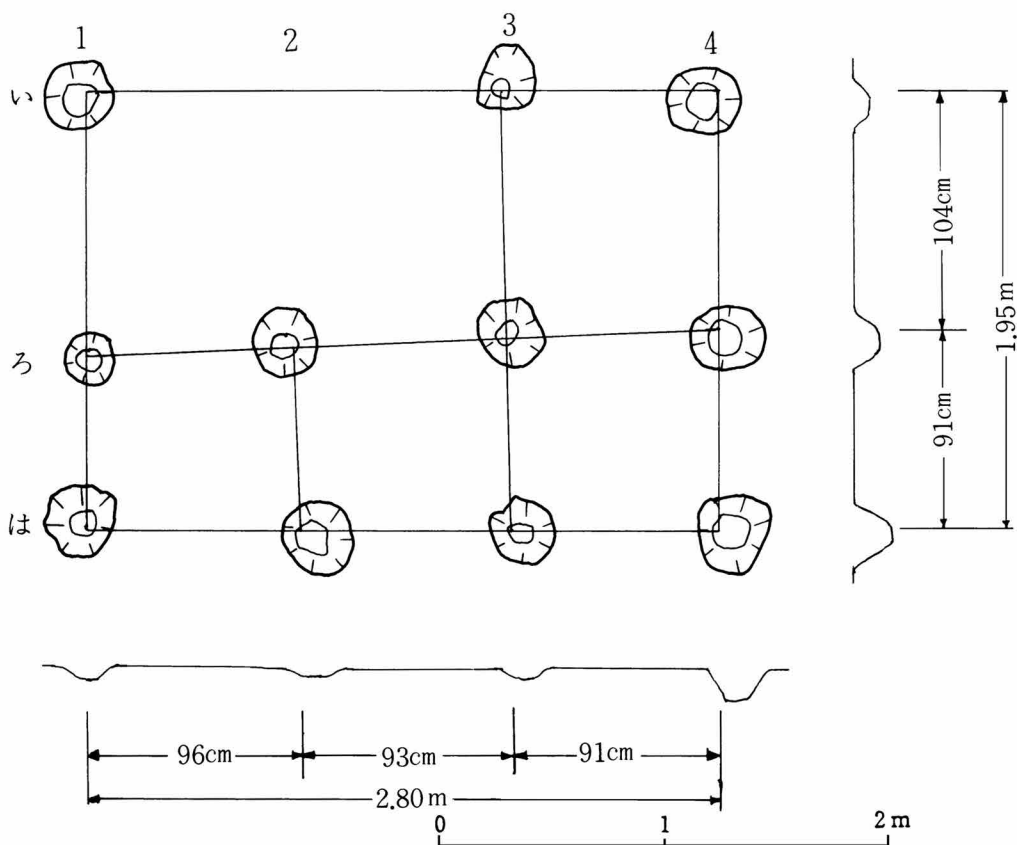


第29図 第1号掘立建物址

2. 第2号掘立建物址 (第30図)

1号建物址の東側に隣接している遺構である。規模は全体で東西1.98m南北2.73m (1.5間)の建物址である。その建物址の柱間は、「い」の通り 1~2 では柱真芯で1.82m (1間) 「ろ」の通り 1~2 では85cm、 2~3 では92cm、 3~4 では82cmを測る。「は」の通りでは、 1~2 の柱間は 1~2 では99cm、 2~3 では92cm、 3~4 の柱間は82cmを測る。以上の柱間間隔の掘立建物址である。この建物址は柱間間隔より倉庫的な建物址であると考えられる。

(友野)



第30図 第2号掘立建物址

第Ⅶ章 結 語

辰野高等学校の増改築事業に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査は、昭和61年第1次調査以来平成2年度まで4回にわたる調査が行われてきた。この調査も今次をもって終了する段取りとなった。今回の調査は、上の山遺跡の地域では最南端の部分に当る個所である。本調査も発掘を重ねる度毎に変わった貴重な資料が得られてきているので、それらを総括し、今回の調査の成果と合わせ若干の所見を述べ、まとめとしたい。

今回の調査では、辰野高等学校のおかれている場所が地形的に見て重要な個所に当たっているので、考古学調査と合わせ、地形・地質の分野も研究に加えた。この調査には第四紀学会員である松島信幸・寺平宏の両氏の協力を得た。この内容については第Ⅱ章に詳細に述べられているのでそれを見ていただきたい。この上の山遺跡のおかれている台地の成立した時期を地質の分析から明らかにできた。「上の山」は、三岳スコリア（5.7万年前）、千本松スコリア、辰野軽石層（6.6万年前）、そして不規則な凍結攪乱層（クリオタペーション）の間に成立した層位の上に位置していることを明らかにすることができたことは、今回の調査の特筆すべき点の一つである。次に縄文時代の遺構をみると、第6号住居址は、調査区域中では西南の位置にあっており、この住居址から出土した遺物は勝坂式と藤内式が主体であることから、縄文時代中期中葉の遺構とした。第7号住居址は、第1号建物址によって遺構の大方が破壊されていた住居址である。住居址に伴う遺物から縄文時代中期後葉に比定されると考えられる。

土坑、第33号土坑は、調査区域ではC-15グリッドに発見された遺構である。遺構内からは遺物が発見されていないので時期は不明。第34号土坑は、調査区域のD-15グリッドに検出された遺構で、遺構内からは表裏に条痕文が施された縄文時代早期末の土器、薄手指圧文の前期初頭型式の中越式土器類、その他縄文中期初頭型式梨久保式土器が出土した。そのほか第36～38号土坑からは縄文時代中期後葉型式の土器の小破片が出土している。

中世の遺構としては第8号住居址が発掘区域の畧々中央に発見されたが、その規模は東西4.55m、南北3.65m、深さは1.40mとかなり深い竪穴式の遺構である。遺構内には建物を建てたと考えられる柱穴址や、排水溝が設けられ、住居址の畧々中央に炉址が検出されたところより住居址とした。住居内からは、天目茶碗、灰釉陶器皿、内耳鍋、播鉢等と大観通宝が出土した。これらの出土遺物より、16世紀代に造られた遺構であろうと考える。本址と同年代頃の例としては、駒ヶ根市東伊那の遊光遺跡第9号住居址がある。

第1号建物址はU-24～25グリッドに発見された遺構である。その規模は東西4.80m、南北は2.8m、深さ1.2mを掘り込んで造られたもので、内部には壁にそって大小20個の柱穴が検出されているところから、竪穴式の建物址であることが確認できた。遺構内からは内耳鍋、灰釉陶器、刀子、古銭等が検出された。これらの出土遺物から15世紀中葉の建物址と考えられる。

第2号建物址は、Y-26グリッドに発見された建物址であるが、建物址であるという確認はされたが、時間の都合で調査が打ち切られてしまった。遺構内からは遺物は出土しなかったので、時期は不明である。本址のような型式の建物址は伊那市東春近、殿島城遺跡、飯島町岩間城跡、同町唐沢城跡にその類例がある。

第1号掘立建物址は、調査区域C～E-6～7に発見された遺構である。建物の柱穴列の規模は東西1.82m、南北4.55mと南北に長い建物址で、建物の柱間隔は柱穴の柱真芯で91cm（3尺）が基本となっている建物址である。これら柱列は、外廻りの柱列はよいとして、中間の柱列の存在するものは建物の様式上床張の構造をなす建物址と考えられるものである。遺構内からはこの建物址に関わると思われる遺物は出土しなかったので、時期は不明である。

第2号掘立建物址は第1号掘立建物址に接して発見された遺構である。その規模は南北2.72m 東西1.98mの南北に長い建物址で、南側に一部柱を欠いているところは入口か土間として使われた部分という意見もあり、第1号掘立建物址と同様床張のある構造をもった建物址と考えられる。

そのほか第33号・34号の土坑付近や第8号住居址近辺にも柱穴址ではないかと思われる遺構が認められるところから第1・2号掘立建物址に類似した建物址の可能性は十分ありそうである。これらの遺構は遺物が伴わないので時期は不明であるが、古代、中世にこうした例が多く認められるところから、古代か中世ではないかと考えられる。

上の山遺跡の第1次～第4次の調査を通しての成果を総括してみると、縄文時代では早期の押型文土器（約8,000年前）が発見されている。早期末では鶴ヶ島台や茅山式などの土坑6基も検出された。縄文時代前期では、初頭型式である中越式土器、後葉期ではボタン文の付いた諸磯c式住居址1基と、土坑1基なども発見された。縄文時代中期では中葉と後葉の住居址5基と小竪穴6基、土坑5基が出土した。また時期不明の土坑15基も検出された。

集石では、縄文時代前期のもの2基と、時期不明の集石1基が発見された。

第8号住居址は上伊那郡内では平成元年に駒ヶ根市東伊那遊光遺跡に続いて二例目の発見となった中世の竪穴式居住址であり、大変貴重な資料である。

今回の調査では中世の竪穴式建物址が2基発見された。上の山遺跡としては第8号竪穴建物址と合わせて3基となった。

そのほか中世と思われる空堀や、腰郭などが認められた。これらの資料はこの地に設けられたという中世の城郭址の研究上貴重な資料となろう。

終わりに長野県教育委員会文化課・辰野町教育委員会小林教育長、小松課長、三浦課長、平泉係長、田畑幸雄氏には大変お骨折をいただいた。また調査副団長丸山敏一郎先生には発掘に当たっての御協力を賜りました。木下平八郎氏には調査及び整理に当り御協力を得た。ここに紙上をもって厚く感謝を申し上げる次第である。

（友野）

註・参照文献

- 註 1 長野県教育委員会 1973（昭和48）『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 上伊那郡辰野町その1（昭和47年度）』
- 註 2 伊藤富雄「上伊那十三騎」『伊藤富雄著作集』第4巻－戦国時代の諏訪－1980（昭和55年）
- 註 3 上伊那誌編纂会 1965（昭和40）『長野県上伊那誌』第2巻歴史篇
竹本弘幸他『新規御岳テフラ層の層序と年代』
- 1 鳥居龍蔵 1926（大正15）『先史及原始時代の上伊那』（上伊那教育会）
- 2 日本道路公団・名古屋支社・長野県教育委員会 1973（昭和48）『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－上伊那郡辰野町その2（昭和47年）』
- 3 岡谷市教育委員会 1976（昭和51）『梨久保遺跡』
- 4 駒ヶ根市教育委員会 1977（昭和52）『丸山南遺跡緊急発掘調査報告書』
- 5 長野県史刊行会 1981（昭和56）『長野県史考古資料編』全1巻（1）
- 6 宮田村誌刊行会 1982（昭和57）『宮田村誌』
- 7 駒ヶ根市教育委員会 1983（昭和58）『船山遺跡緊急発掘調査報告書（第1次および第2次）』
- 8 長野県史刊行会 1983（昭和58）『長野県史考古資料編』全1巻（3）
- 9 伊那市史刊行会 1984（昭和59）『伊那市史（歴史編）』
- 10 梨久保遺跡調査団 1986（昭和61）『梨久保遺跡』
- 11 辰野町教育委員会 1988（昭和63）『上の山遺跡Ⅱ 長野県辰野高等学校校舎改築に伴う第2次、第3次埋蔵文化財調査報告書』
- 12 小林達雄 1988（昭和63）『縄文土器大観』小学館
- 13 塩尻市教育委員会 1988（昭和63）『一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘報告書』
- 14 日本中近世土器研究会 1988（昭和63）『中近世土器の基礎研究』Ⅵ
- 15 駒ヶ根市教育委員会 1990（平成2）『反目・遊光・殿村・小林遺跡 駒ヶ根市東部地区 県営ほ場整備事業埋蔵文化財緊急発掘調査』
- 16 瀬戸市歴史民俗資料館 1985（昭和60）『研究紀要』Ⅵ
- 17 瀬戸市歴史民俗資料館 1986（昭和61）『研究紀要』Ⅴ
- 18 瀬戸市歴史民俗資料館 1989（平成元）『研究紀要』Ⅶ
- 19 美濃古窯研究会 1976（昭和51）『美濃の古陶』
- 20 辰野町誌刊行委員会 1988（昭和63）『辰野町誌 自然編』
- 21 辰野町誌刊行委員会 1990（平成2）『辰野町誌 歴史編』

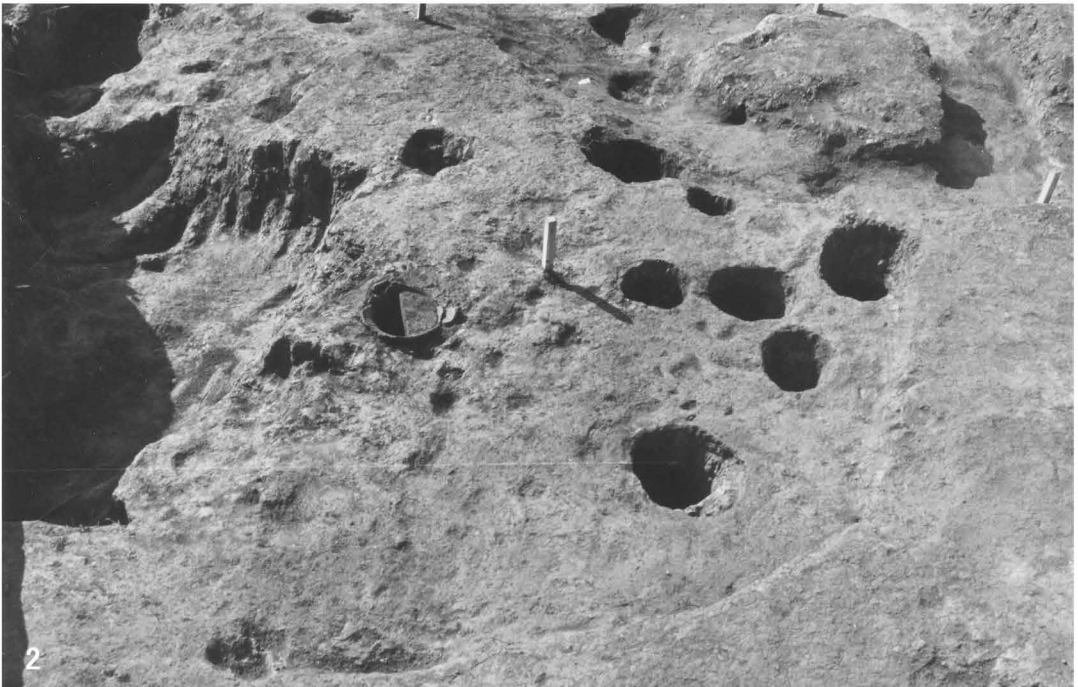


1 第4次発掘調査区全景 東から
2 第4次発掘調査区全景 北から

図版 2



1 第1・2号掘立建物址 西から
2 第8号住居址 東から

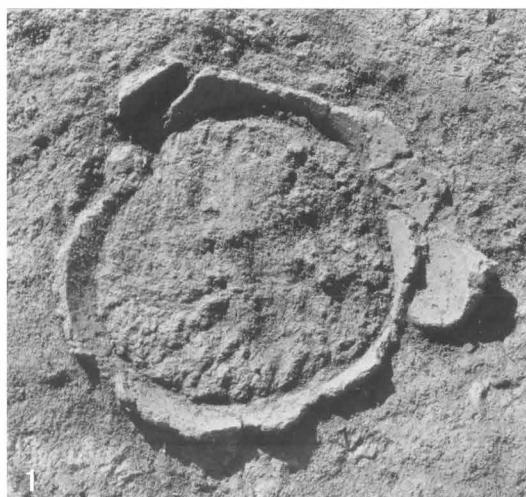


1 第1・2掘立建物址 南から
2 第6号住居址

图版 4

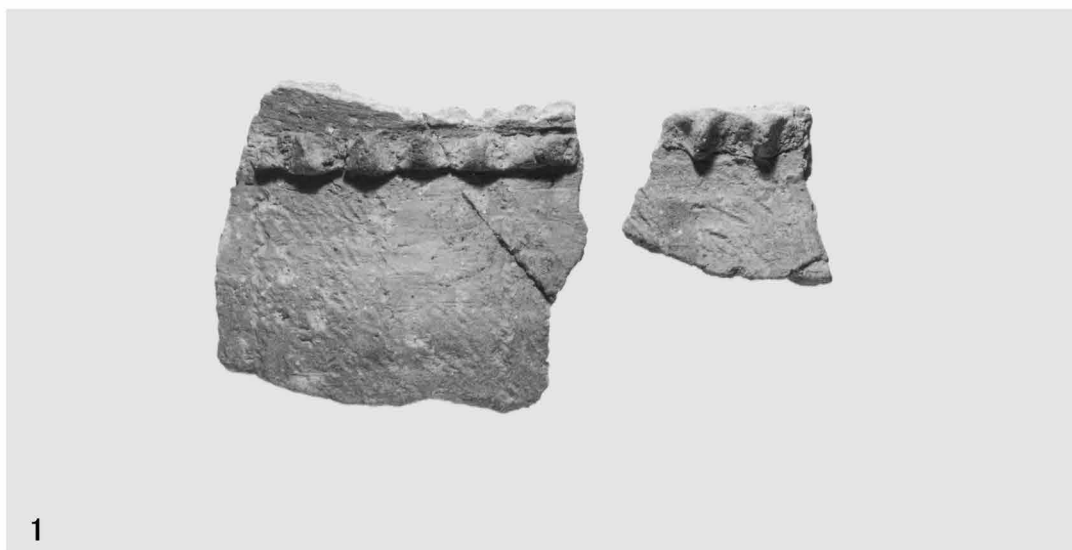


1 埋甕炉土器
2 第6号住居址土器

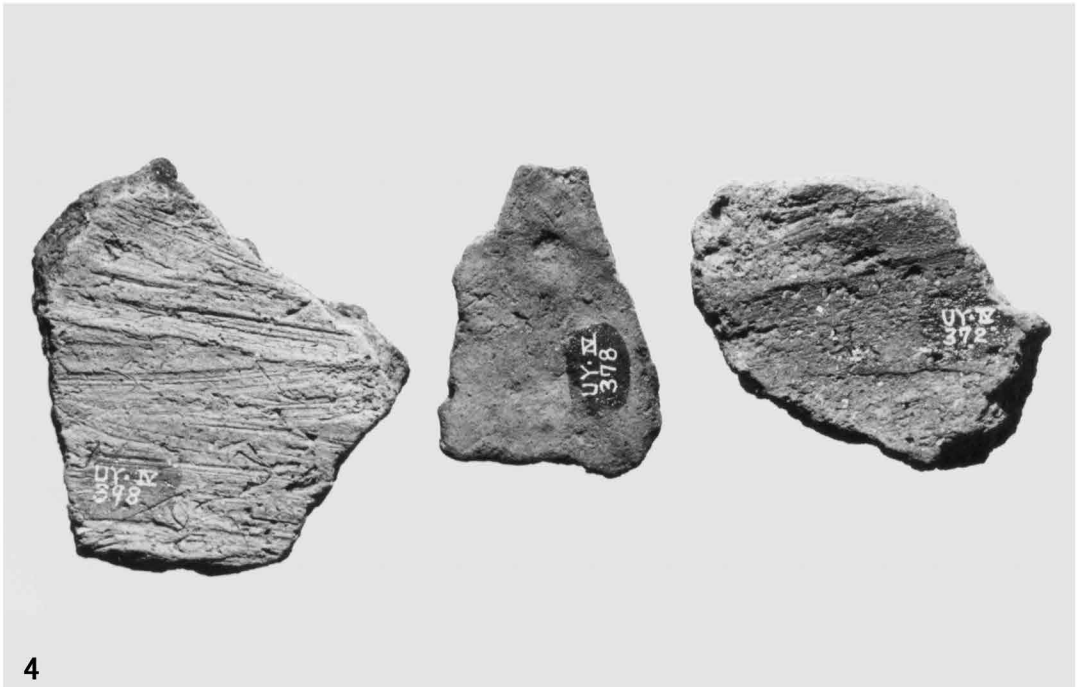
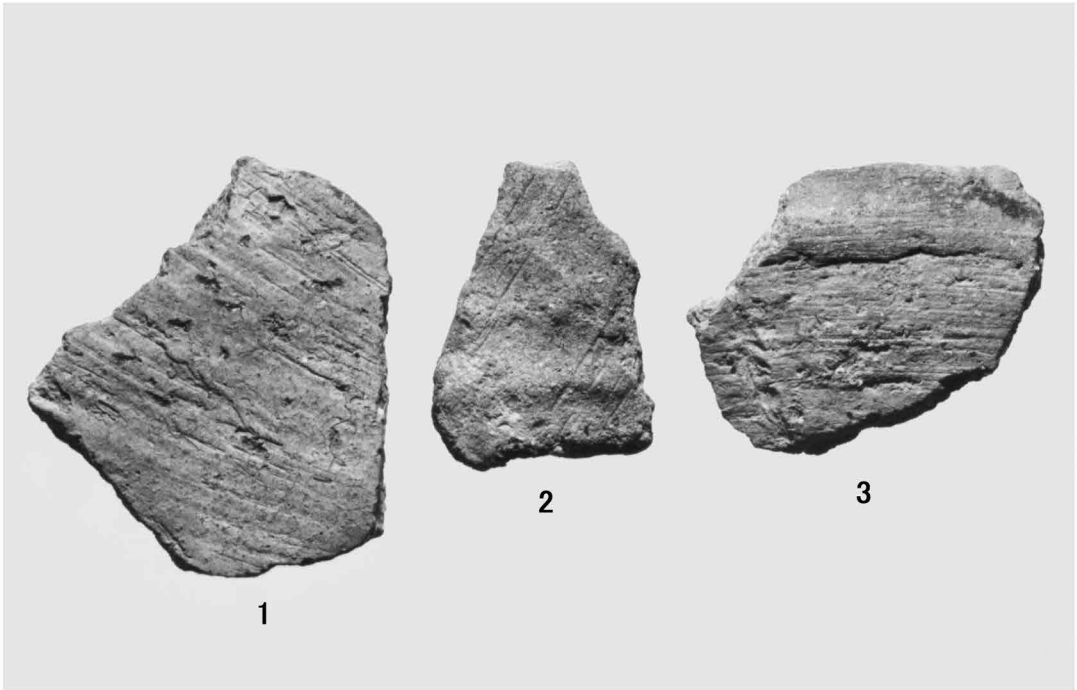


1.2 第6号住居址埋甕炉
3.4 第34号土坑

图版 6



1.2 第34号土坑出土土器



1. 2 第 34 号土坑覆土出土土器
3 第 33 号土坑、東側、ピット出土土器
4 同上裏面

图版 8



- 1 第7号住居址
- 2 第35·36·37·38号土坑



1



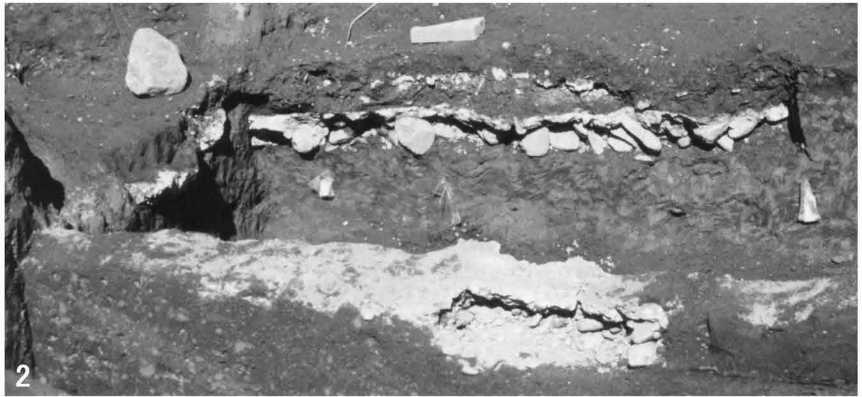
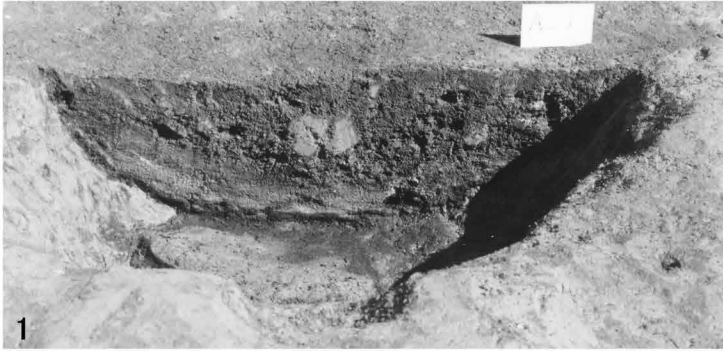
2

1 第7号住居址出土土器
2 遺構外出土土器

図版 10

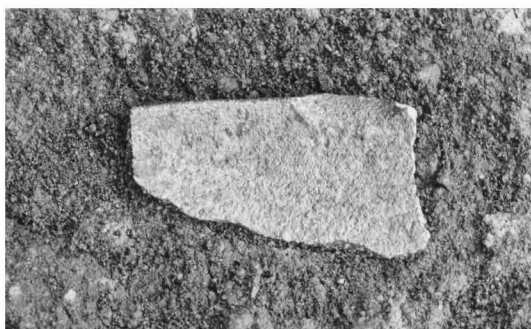


1 第8号住居址 西から
2 第8号住居址 東から

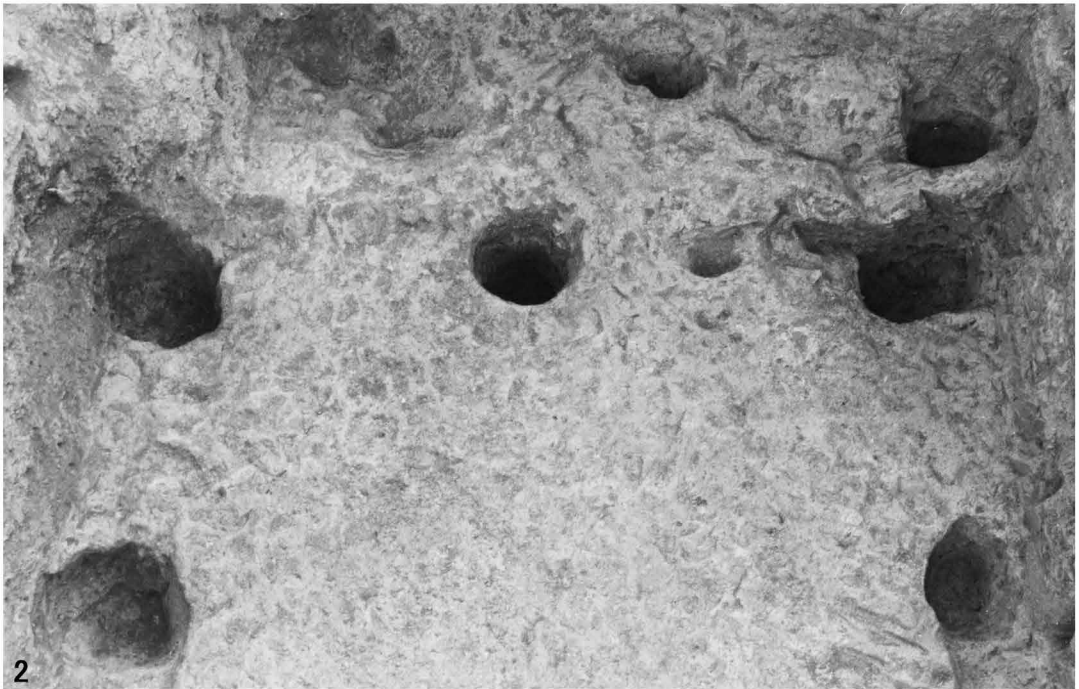


- 1 第8号住居址、炉址、断面
- 2 第8号住居址、上部破坏状况
- 3 第8号住居址、壁面、痕迹

图版 12



第 8 号住居址遺物出土狀況

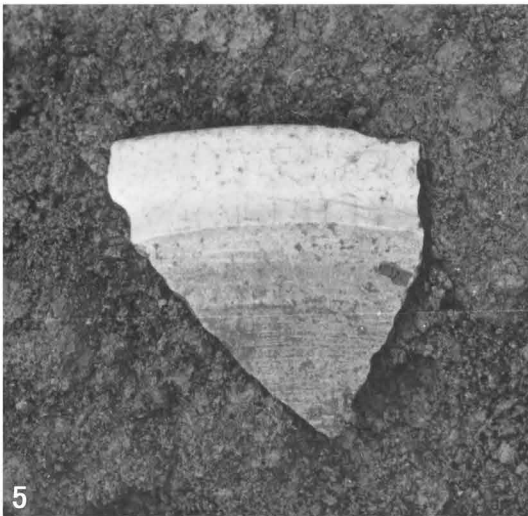
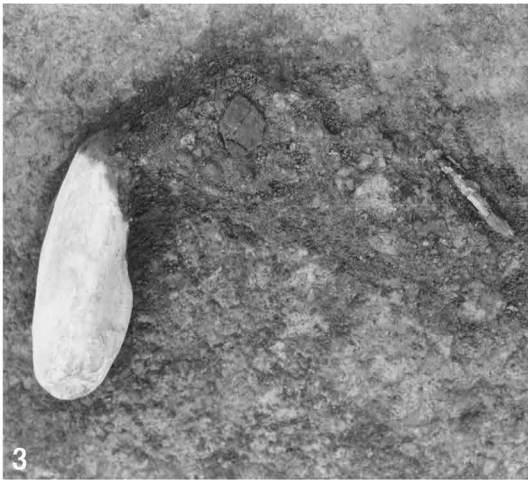


1 第1号建物址 東から
2 第1号建物址 入口付近柱穴

图版 14



1 第1号建物址 北壁面
2 第1号建物址 南壁面



1～5 第1号建物址遺物出土状況
6 第8号小穴竪穴遺物出土状況



1 第7号小竖穴
2 第8号小竖穴

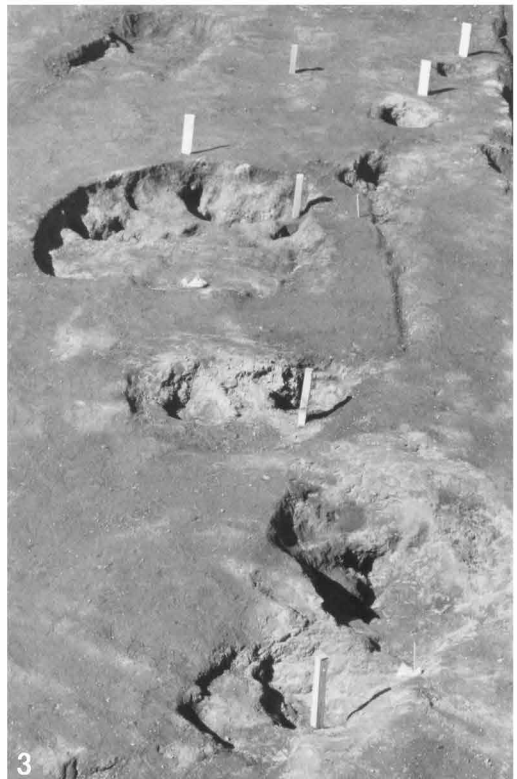


1. 2 第7号小竖穴遺物出土状況

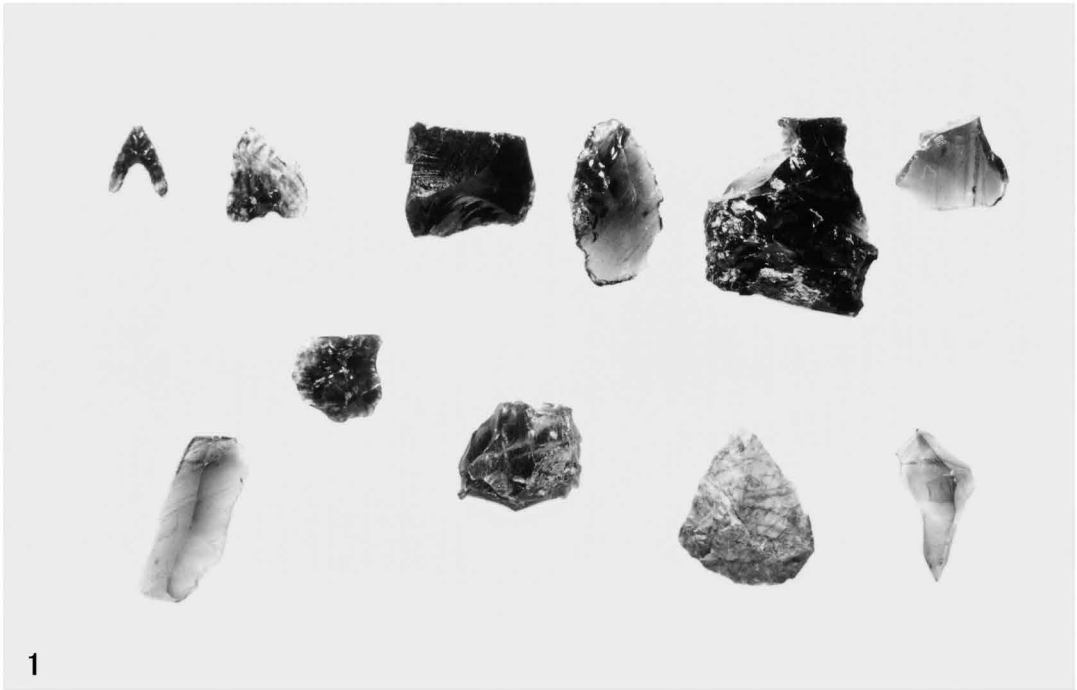
3 第8号住居址覆土出土縄文土器、石器



1 16世紀各遺構出土の陶磁器
2 第1号建物址出土刀子



1 第9号小竪穴、第2号建物址 (左上)
2 C・D-15・16の土坑、ピット群
3 A・B・C-8の土坑、ピット群



1 各遺構出土の小型石器
2 第8号住居址出土の孤手石

上の山遺跡Ⅲ

長野県辰野高等学校校舎改築に伴う
第4次埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成3年3月25日
編集・発行 辰野町教育委員会
〒399-04
長野県上伊那郡辰野町中央1
☎0266(41)1111(代)
印刷所 精美堂印刷所
